



報告資料

「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会

第6回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009発表会

■平成22年3月6日（土） 日経ホール■

主催：認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009実行委員会



当日プログラム

◆第1部(第6回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議)

議事	発表者
開会挨拶	堀田力(「認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」議長)
来賓挨拶	長浜博行(厚生労働副大臣)
映像とリレーメッセージ 「これからに向けて、歩みだそう、歩みつづけよう」 1)映像 2)リレーメッセージ ・認知症サポーター養成事業より ・本人と家族の力を活かしたケアマネジメント事業より ・町づくりキャンペーン事業より ・本人ネットワーク支援事業より	進行 村田幸子(福祉ジャーナリスト、100人会議会員) ・清水秀晃さん/武蔵野美装(株)(認知症サポーター) ・西村文雄さん(奥様を介護) ・山川由美子さん(阿佐ヶ谷介護者の会) ・青津優子さん(平成15年に認知症の告知をうける) ・並川由美子さん(平成17年に認知症の告知をうける) ・まとめ:堀田力

◆第2部(「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2009 発表会)

議事	発表者
1. 「町づくり 2009 モデル」の経過報告	本間 昭/「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2009 実行委員長
2. 「町づくり 2009 モデル」表彰	本間 昭/「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2009 実行委員長
3. 「町づくり 2009 モデル」発表と紹介 1) 「誰でもが安心して暮らせる街に～小樽市高齢者懇談会『杜のつどい』の市民後見人活動～」 2) 「地域と共に生き活きと暮らす～認知症発症者が主になり運営する朝市・地域食堂～」 3) 「『認知症買い物セーフティネット』普及事業～認知症になっても安心して買い物ができる地域づくり～」 4) 「ネットワーク形式(杉並方式)で「介護者の会」を運営する試み～介護者の心に寄り添える「介護者の会」を目指して～」 5) 「共生を軸とした認知症地域支援の取り組み～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～」 6) 「熊本県における行政・関係団体・県民が一体となった認知症でもだいじょうぶなまちづくり」 7) 「認知症を受け入れるということ～若年性認知症を抱える夫妻と支援者との出会い～」	インタビュー 町永俊雄/NHKキャスター、町づくりキャンペーン 2009 地域活動推薦委員 1) 小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」 (北海道小樽市) 2) デイサービスセンター侶 (香川県高松市) 3) NPO 法人 HEART TO HEART (愛知県東海市) 4) NPO 法人 杉並介護者応援団 (東京都杉並区) 5) NPO法人 地域の寄り合い所 また明日 (東京都小金井市) 6) 熊本県 健康福祉部 高齢者支援総室 認知症対策・地域ケア推進室 (熊本県) 7) 富士宮市サポートチーム/佐野 光孝・明美 (静岡県富士宮市)

本日のまとめ

堀田 力/100人会議議長、町づくりキャンペーン 2009 地域活動推薦委員長

- ・閉会後にホールにて第2部の受賞者と来場者による交流会を実施
- ・ホールでは、これまで応募いただいた町づくり事例の展示・デモを実施

目次

当日プログラム

I. 第1部「第6回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」	
1. 開会挨拶	3
2. 来賓挨拶	5
3. 映像とリレーメッセージ「これからに向けて、歩みだそう、歩みつづけよう」 ～「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの様々な取り組みから～	
1) キャンペーンの歩み	7
2) 映像	8
3) リレーメッセージ	9
II. 第2部「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2009発表会」	
1. 「町づくり2009モデル」の経過報告	19
2. 全国から寄せられた地域活動一覧（応募先着順）	20
3. 「町づくり2009モデル」表彰	22
4. 「町づくり2009モデル」7団体による発表	24
III. 本日のまとめ	39
IV. 平成21年度の各活動	
1. 「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの事業（概要）	41
2. 「『認知症サポーター100万人キャラバン』～認知症サポーター養成講座」 実施状況	42
3. 「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2009」（概要）	50
4. 「認知症の人『本人ネットワーク』支援」活動報告	52
5. 「認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」活動報告	60
6. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の啓発・普及活動	68
V. 資料	
1. 「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年」の構想	69
2. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の役割	70
3. 100人会議 会員一覧	71
4. 100人会議 参加リスト	72
5. 100人会議 会員からのメッセージ	73
6. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり事例 データベース	74

I. 第1部「第6回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」

1. 開会挨拶

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議議長 堀田 カ

みなさん、こんにちは。

本日はお足もとの悪い中、これだけの方にお越しいただきまして、たいへん心強く思っております。

厚生労働省の「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年構想」に賛同し、私たち民間で啓発活動をすすめようと発足した「認知症になっても安心して暮らせる100人会議」は、本日もメンバーが何人か集まってきていただいておりますが、会を代表してご挨拶申し上げます。



100人会議が発足して、10ヵ年計画のちょうど真ん中、5年目であります。100人会議が推進しております「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンには4つの事業がありまして、事業の中身をあらわそうとそれぞれ大変長い名前がついておりますが、その1つ「認知症サポーター100万人キャラバン」は、本日皆さんの中にもオレンジリングをつけておられる方もいらっしゃいますが、認知症を理解するサポーターを100万人養成する事業なのですが、スタートして4年と少し、昨年5月に目標の100万人を達成し、現在は約150万人に上るなど、どんどん加速度がついています。この事業を推進している「キャラバン・メイト連絡協議会」の事務局、菅原弘子さんには大変熱心にやっけていただいております。

これを地域でどう活かしていくかが中核になってくるのですが、それが「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンであり、全国各地で地域づくりを展開していこうというのですが、第2部において、モデル活動が紹介されます。これも着実に広がっています。

3つめが、「認知症の人」本人ネットワーク事業であり、4つめが、「認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」事業なのですが、これらは、本人に語っていただく、そして本人や家族の声を活かしたケアマネジメントを展開していこうというもので、これも地道な運動ですが着実に進展いたしております。

このように皆様の協力をいただき、この運動は着実に広がっているのですが、それよりも認知症の方の増える勢いのほうが大きく、認知症の方は200万人を超えていると推計されています。160万人のサポーターは大変な数ですが、認知症の方のほうがまだまだ多いのが実態でありますので、これでは追いつきません。町づくりの取り組みも第2部において、モデルとなったすばらしい活動が紹介されますが、それがどの町でもごく普通に展開されているというようにならないといけません。認知症の本人がさまざまな場で語ってくださるようになってきていますが、このことはうれしいことです。その本人の意見をしっかり伝え、活かしていく後見人、これも専門家にまかしては数が及びません。市民の方にどんどん参加していただいで、市民後見人に

しっかりついていただかなければいけない。これはまだまだの事業であります。

この大変な勢いですすんでいる認知症の実態を、どんな状況になってもみんなでしっかりと受けとめて、この認知症になっても安心して暮らせる町づくりがしっかりと成功いたしますように、これからもがんばっていきたいと思います。中間年という節目を越え、これからもさらにみんなでがんばろうと思いをかため、知恵を蓄える、本日がそういう会になればうれしいと思います。

長浜厚生労働副大臣にお越しいただき、その前に趣旨を説明させていただきました。

みんなでがんばりましょう。

2. 来賓挨拶

厚生労働副大臣 長浜 博行

本日、ここに「第6回『認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議』及び『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2009発表会」が開催されるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。



まず、堀田 力議長をはじめ「認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」の皆様方におかれましては、日頃より、認知症に関する知識や情報の普及、さらには、認知症になっても安心して暮らし続けられる地域づくりなどを通して、認知症の方々とそのご家族の方々への支援に多大なるご尽力を賜っており、ここに、心から敬意と感謝の意を表します。

また、本日、「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2009」の「町づくり2009モデル」を受賞される7つの団体の皆様方に対しまして、心よりお慶び申し上げます。

さて、既に皆様ご承知のとおり、我が国は、世界的にも例のないスピードで少子高齢化が進んでおります。認知症の高齢者の方々は、現在、全国で約208万人おられるものと推計しており、2015年には250万人になるものと見込まれています。また、若年性認知症についても、社会的に関心が高まっております。

認知症は誰にでも起こりうる可能性があります。一方で、早期に発見し、適切な医療や介護の提供とあわせて、周囲の理解と地域の支えがあれば、認知症の方が尊厳をもって自分らしい生活を送ることは十二分に可能であると考えています。

こうした中、厚生労働省では、平成21年度の介護報酬改定において認知症ケアに関する評価を行うこととするなど、介護サービスを充実させるとともに、国民の皆様にも、認知症についての正しい知識と理解を持っていただき、認知症の方々が尊厳をもって、住み慣れた地域で暮らし続けることを支える「地域づくり」を進めています。

平成17年度に「認知症を知り地域をつくる10ヵ年」構想を提唱し、『認知症を知り 地域をつくる』キャンペーンの中で、「認知症サポーター100万人キャラバン」や「認知症の人『本人ネットワーク』支援」などの取組を行っております。

認知症の方々とその家族を応援する「認知症サポーター」は、皆様方のお力添えのおかげで、昨年100万人の大台を突破し、現在では全国で約150万人に達しています。

また、認知症の方同士が知り合い、互いの悩みや体験を語り合うことを目指して、「認知症の人『本人ネットワーク』」づくりが進められ、出会いとつながりの機会が広がっています。

さらに、厚生労働省では、地域において認知症の方々を支援する体制の構築を進めており、『「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン』は、その重要な柱の一つとなっています。

本日、「町づくり2009モデル」を受賞され、この後発表していただく7つの団体の皆様方は、それぞれの地域で、若年性認知症の方を支える取組や認知症サポーター養成講座などを活用し、地域資源のネットワーク化を進める活動などに取り組んでおられると伺っております。

こうした先駆的な取組が全国に広く発信され、全国各地で、認知症になっても安心して暮らせる町づくりが進められることを心より期待しています。

平成26年度には、認知症を理解し支援するサポーターが地域に数多く存在し、すべての町が認知症になっても安心して暮らせる地域になっていることを目指して、厚生労働省としても、引き続き積極的に取組を進めてまいりますので、本日ご参集の皆様方を始め、広く国民の皆様方の一層のご理解、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本日ご参集の皆様方のご健勝と、今後ますますのご活躍を、心よりお祈りいたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。

3. 映像とリレーメッセージ「これらに向けて、歩みだそう、歩みつづけよう」
 ～「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの様々な取り組みから～

1) キャンペーンの歩み

(平成16年度)

■国際アルツハイマー病協会・京都会議 H16/10/15-17
 -本人による発言:越智俊二氏、クリスティーン・プライデン氏
 ※「痴呆の人とともに暮らす町づくり」キャンペーン(町づくりキャンペーン初回)

■痴呆から認知症への名称変更 H16/12/24

平成17年度

●第1回100人会議
 (キックオフ)
 H17/7/8

会員数 82

土台づくり

・「認知症を知る1年」(キャンペーン 開始)
 ・趣旨に賛同する個人・団体の会員参加
 ・啓発活動(ホームページ、リーフレット配布)
 ・サポーター数:21,913人 H18/1/26現在

●第2回100人会議
 H18/2/4 (報告会)

会員数 96

平成18年度

町づくりが
めざすもの
=認知症の
人の声

・認知症の人「本人会議」の開催 **本人会議アピール**
 ・会員が取り組みへ協力(企業団体サポーター講座等)
 * マスコミとの連携(NHK認知症キャンペーン、映画「明日の記憶」「そうかもしれない」ほか)
 ・サポーター数:117,226人 H19/1/5現在

●第3回100人会議
 H19/3/3 (報告会)

会員数 100

平成19年度

取り組みの広
がいは「認知
症新時代」へ

・認知症地域支援体制構築等推進事業との連携
 * 海外への情報発信(英語版リーフレット作成→ホームページ
 および国際シンポジウムを通じた海外への紹介)
 ・サポーター数:360,781人 H20/1/10現在

●第4回100人会議
 H20/3/1 (報告会)

会員数 100

平成20年度

取り組みの
蓄積→
全国各地へ
の波及

・町づくり事例データベースの整備
 ⇒ホームページ<検索サイト>のオープン
 ・認知症地域支援体制構築等推進事業との相互協力
 (情報提供⇄成果フィードバック)
 ・サポーター数:723,368人 H20/12/10現在

●第5回100人会議
 H21/3/7 (報告会)

会員数 100

平成21年度

取り組みの
蓄積→
全国各地へ
波及拡大

・サポーター100万人達成(H21年5月)
 ・町づくり事例データベースの拡充
 ・町づくりモデル(受賞)活動のその後をレポート
 ・認知症地域支援体制構築等推進事業との更なる
 相互協力(情報提供⇄成果フィードバック)
 ・サポーター数:1,469,595人 H21/12/31現在

●第6回100人会議
 H22/3/6 (報告会)

会員数 99

平成22年度～

「認知症を知り 地域をつくる10カ年」 次の「アクション」へ

2) 映像

平成 17 年度から「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンはスタートし、中間年を迎えました。

サポーターが増え、サポーターとともに、ご家族自身もいろいろな力を出され、ご家族が支えている本人、それととりまくたくさんの地域の方、介護や医療の専門職も地域の一員としていっしょに輪を広げながら、キャンペーンがすすんでいます。今年度、キャンペーンの最前線で活動された方々の取り組みの様子を映像で紹介し、また登壇いただいて、これからに向けて歩みだし、さらにこうした歩みを一歩ずつすすめていくために、どう取り組んでいくのか、メッセージをいただきました。

(以下、映像から抜粋)



- 認知症の理解と支援者の輪を広げます
- 認知症サポーター100万人キャラバン



- 本人や家族の声を支援に活かします
- 認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進



- ともに暮らす町づくり活動を広げます
- 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン



- 本人のネットワークを広げます
- 認知症の人「本人ネットワーク支援」



3) リレーメッセージ

◇「認知症サポーター100万人キャラバン」

・清水 秀晃さん(武蔵野美装株)。収集作業員全員が認知症サポーター養成講座を受講)

◇「認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」

・西村 文雄さん(平成15年にアルツハイマー型認知症と診断された妻を、娘2人と協力して介護)

◇「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン」

・山川 由美子さん(阿佐ヶ谷介護者の会。実母を日々施設へ通いながら介護)

◇「認知症の人『本人ネットワーク』支援」

・青津 優子さん(平成15年認知症の告知をうける)、並川 由美子さん(平成17年認知症の告知をうける)

◆堀田 力(100人会議議長)

<進行>村田 幸子(福祉ジャーナリスト、100人会議会員)

村田◆今、映像でさまざまな活動をご紹介いたしました。その中に登場された方々が登壇されています。今までの5年間の活動をふりかえりながら、さらにこれからの5年にむけて、どうこの活動を骨太にしていくなか、地域全体に理解していただくか、そんなことを考えながら、すすめていきたいと思っております。

村田 幸子

福祉ジャーナリスト。

100人会議会員。

立教大学英米文学科卒業、

NHKにアナウンサーとして入局。

スタジオ102、NHKニュースワイドなど報道番組のキャスター・リポーターなどを経て、NHK解説委員(厚生行政担当)をつとめた。現在は福祉ジャーナリストとして、全国各地の認知症介護・福祉の現場を精力的に取材している。



●「認知症サポーター100万人キャラバン」から

村田◆清水さんは認知症サポーターで、武蔵野市でゴミ収集のお仕事にかかわっていただいておりますが、今日は真新しい制服に着替えて登場いただきました。清水さんはサポーターになられて、どのくらいですか。

清水◆認知症サポーター講座を市から打診されたのが平成20年なのでもう2年近くになります。

村田◆会社の方はみなさんが研修をうけておられるのですか。

清水◆そうですね。会社のすべての職員にサポートを要請されましたので、みんなが受講しています。

村田◆武蔵野市は市内全域で各戸ごとにごみ収集が行われているそうです。そんなところから、認知症サポーターになりませんか、というお話しがあったのですか。

清水◆武蔵野市は5年ほど前からごみの戸別収集が始まり、私たちはごみを収集して武蔵野市内

清水 秀晃さん

武蔵野美装株式会社

営業部営業課 塵芥担当主任。

ごみ収集業務を市から受託

する、武蔵野美装株式会社

(本社:東京都武蔵野市)は、平成20年、市のよびかけによる「認知症サポーター養成講座」を受講。収集作業員全員がサポーターとなる。収集車に防犯パトロールステッカーとともに認知症サポーターのステッカーを貼り、日々ごみ収集業務でまちをまわっていることを活かし、地域の見守りも行っている。



をひんぱんにまわっているため、誰よりも町を巡回するということから、市よりサポーター講座の要請をうけました。

村田◆実際にサポーターとなられて、お仕事をしていくうえでどういうメリットがありましたか。

清水◆ごみの分別がとても難しい、分別についてわからないと直接たずねられることがあります。サポーター講座の受講前は、ごみ分別についてこちらの考えを一方的におしつけていたのですが、受講後は、そういう人（認知症の方）がいらっしやる、そういう人の気持ちになってみる、ということを意識し、わかりやすく、わからない方にはわかるまで説明するというのを、作業員全員が努力するようになりました。

村田◆作業員全員が、相手の立場にたった話し方、説明の仕方ができるようになった。

清水◆そうですね。自分が相手の気持ちになって、どういう理解をされているのかを考え、相手の気持ちになって説明することができるようになりました。

村田◆今、胸にオレンジリングをつけておられますが、いつもそうしていらっしやるのですか。

清水◆オレンジリングは腕につけるものですが、作業中、手袋をしていますし、また長袖で隠れるため、目立たないということで、社員は皆、社員証につけています。腕につけている人もいますが、ほとんどの人は目立つように社員証の横につけ、誰がみてもみえるようにしています。

村田◆目立ちますね。

清水◆そうですね。

村田◆それは何ですか、ときかれることがありますか。

清水◆ありますね。(笑) そのときは、(認知症サポーターについて) 詳しく説明します。

村田◆どういう反応がありますか。

清水◆こういう仕事をしている以上、いろいろな人に出会いますから、それなりに反応はさまざまですけれど、まだ(認知症を)理解していない人も、私たちの説明によって理解されることがあるではないか、と考えています。

村田◆ありがとうございました。

●「本人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」から

村田◆西村さんは、センター方式をとりいれて奥様の介護をしていらっしやるそうです。今、映像を拝見しましたら、娘さんとの話し合いの中で、近所に暮らしていても、お母様のことを家族として、わかっているようでわかっていない、シートを書き出してみると、こんな人間だったんだなおっしやっておられましたね。ずいぶんいろいろなことがわかってくるのですね。

西村◆そうですね。センター方式シートを、妻がアルツハイマーになるまで知らなく

て、家族の会の支部の人から紹介をうけました。施設でのケアのために書くような項目もあるのですが、いろいろな項目をみたときに、私一人では書ききれないと思いました。本人の生活史と

西村 文雄 さん

平成15年にアルツハイマー型認知症と診断された妻を、娘2人と協力しあって自宅で介護。

講演会で知った認知症の人と家族の会に入会し、さまざまな情報を得る中、センター方式を知り、学習会(家族の集い)に参加。社交ダンスや水泳、ジグソーパズルを楽しみ、レザークラフトの教室を開いたり、他の手芸製品を作成するなど活発だった妻のこれまでの人生や、習慣、好みなどを、センター方式をきっかけに家族と再認識。現在の妻との暮らしに活かす一方、妻が利用する小規模多機能型居宅介護のスタッフとも連携し、ケアに活かしている。



いうシートがありますからね。妻が元気なころ、私は仕事で家にいませんし、そのときは子供のほうが接触が多かったので、シートを書くにあたり、娘に協力を仰ぎました。そのことによって、娘との距離が縮まりましたね。

村田◆奥様のことについて、娘さんといっしょにシートを書くことによって、よく話し合うようになったということですね。

西村◆そうですね。共通の認識をもつようになりました。

村田◆書かれたものを、今、利用されておられる小規模多機能にお持ちになるのですか。

西村◆そうですね。近所に小規模多機能の施設が新規オープンしまして、前もって、この基本シートを提出しました。そうしますと、施設のスタッフの方たちが、妻のことについて事前に理解することができます。最初から本人の気持ちにそった、和やかな生活が送れるケアへの手助けになると思います。福祉・介護施設であればどこでも採用してもらいたいと思います。以前デイサービス2箇所とショートステイを時々使っていましたが、そこではこういうシートは使っていませんでした。行政等がちょっとでもセンター方式などの情報を施設に提供していただければ、逆に、ケアされているスタッフの方たちも楽になると思います。

村田◆なるほどね。

西村◆福祉現場のスタッフの質に違いがありますし、退職率も多いですよ。ぜひ、本人にたいしてこういう統一したケアのシートを導入していただければ、施設に入所しても、このシートをみながら対応できるのではないかと思います。

村田◆西村さんの奥様の場合、こうしたシートがあることによって、とてもよいケアをうけられたとか、よくわかってもらったとか、具体的なことがおありですか。

西村◆小規模多機能に通うようになり、夜の泊まりや食事がそうです。アルツハイマーは進行もしますし、その人によって違うものですから、その人の状況に合ったケアが必要になりますよね。妻は、味噌汁などの汁物を最初にだすとだめなんです。最初に汁物を出してしまうとご飯と混ぜてしまっちゃうらしいので（笑）。そういう細かいことなのですが、事前にスタッフへお伝えすると助かるとおっしゃいました。

村田◆なるほどね。でも、めんどくさくありません？（笑）

西村◆これはたいへんです（笑）。昔から私は仕事から帰ってきて、ぼけっとテレビをみているものですから、家のものはみな、私は年をとったらぼけるだろうとっていました（笑）。そのころは私もそう思っていました。だけど、逆になったんですけれども、このシートは家族一人では書くことはできないですね。家族全員が集まって、家族史の年譜というものが一つできるといいなと思いますね。それから、妻は今、要介護4ですが、もう少し早いうちから、このシートを書いておけば、この「私の思いシート」に本人の気持ちが多少書けたのではないかと思います。

村田◆奥様のためだけでなく、家族全体のコミュニケーションも広がり、理解が深まる、そんな効果があると。

西村◆そうですね。そして、このシートが施設に広まっていけば、地域にも広がっていくのではないかと思います。

村田◆そうですね、それをどう地域づくりに生かしていけるかは、またあとでお話しいただければと思います。

●「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンから

村田◆山川さんは、東京・杉並区の介護者の会に所属されています。家族会は、だいたい一つの市町村に一つくらいしかないと思いますが、杉並は15箇所もあるというのですね。

山川◆そうですね。15箇所です。お助けマップというのを行政がつくってくださって、そのなかの1つである、阿佐ヶ谷介護者の会に所属させていただいています。

村田◆たくさんあるメリットというのはどういうことでしょうか。

山川◆みなさんに会に入ってよかった

ことを伺ったのですが、悩み、不安、喜びを話す場所があるということは、とても力になり、やすらぎの場所になるということと、大切な情報の交換の場であるということですね。特に地域に密着した情報が多く、安心できるということがありました。先輩介護者からのアドバイスがうけられるということも不安を取りのぞいてくれます。また、私たちも老いていく中で、地域のそうした情報は、本当に参考になるねという意見ができました。

村田◆15もあると場所の確保が大変だと思うのですが、これはどういうふうにしてらっしゃるのですか。

山川◆先ほど申し上げたおたすけマップを区がつくってくださり、それが地域包括支援センターなど、いろいろな場所に置いてあります。介護者の方の目に届く範囲、役所をはじめいろいろなところにおいてあります。

村田◆それでは、集まれる場所は行政がつくってくれるというわけですか。

山川◆そうですね。私たちの介護者の会は、ゆうゆう館という区の施設を無料で貸していただいています。杉並区はそのように私たちを支援してくださっています。こうした活動がしやすいようにほかの区も県も、行政の方が支援してくださるとありがたいと思います。

村田◆山川さんご自身はお母様を介護しておられる、と。今は容態も変わられて施設に入られたということですね。介護者の中には会を卒業された方もおられるということなのですか。

山川◆そうですね。会の性質上、年をとってお亡くなりになって、一所懸命介護されておられた方の体験談をおききするということが多いですね。会に残ってくださって、自分たちの経験はこうだよ、という形で力になってくださる方がおられます。

村田◆実際に介護経験がある方だけではなくて、地域住民の方がボランティアで介護者の会に参加されるとか、そういう動きはあるのですか。

山川◆動きはあります。私たちの会（阿佐ヶ谷介護者の会）で、区が地域大学において開催した介護者応援ボランティア講座にて興味をもたれた方の中から、将来のためにと協力して下さる方が出てきています。広がりが出ています。

村田◆やはりそうしたボランティアの方が入ってきてくださると心強いですよね。

山川 由美子 さん

阿佐谷介護者の会 設立当初よりのメンバー。実母を自宅で介護し、現在は特別養護老人ホームに移った実母を、日々施設へ通いながら介護。

阿佐谷介護者の会は、平成18年1月に設立された任意団体。区が開催した「家族介護者への支援者養成講座」修了生が設立した「杉並介護者応援団」（現在はNPO法人）と地域の介護家族の出会いをきっかけに誕生した。応援団が支援する他9つの介護者の会と同様、応援団から派遣される「世話人」の協力のもと月1回開催され、介護者の悩みや不安を共有し語り合う場を提供している。

※杉並介護者応援団は、町づくり2009モデルとして、第2部にて活動発表されました。



山川◆そうですね。一人でも多くのそうした方が入ってきてくださったらいいですね。介護をしている人の疲れた心と身体は、誰が介護してくれるか、ということを見ると、こうした支援者が増えてくると、介護者も楽になると思います。

村田◆ありがとうございました。

●「認知症の人」本人ネットワーク支援から

村田◆今日は当事者の方にもお二人お越しいただいておりますので、お話しを伺ってみようと思います。並川由美子さんは大阪からお越しいただきました。こんにちは。

並川◆こんにちは。

村田◆最初、若年性認知症といわれたときはとても気持ちが落ち込んだということですよ。

並川◆そうですね。もうなにをやっているか、わからなかったです。

村田◆お元気になられたのはどういうきっかけですか。

並川◆愛都（アート）の会に入ってからですね。

村田◆愛都（アート）の会というのは、大阪の当事者の会ですね。

並川◆そうですね。

村田◆そこに入ったら元気になったのですか。

並川◆ええ、もう。自分だけがそんなんになったというわけでなしに、いろんな人もいました。

村田◆自分だけではないと。

<沖田（本人ネットワーク委員、以下「おきた」と表記）より、絵を紹介>

村田◆これはご自分でお書きになった絵ですか。

並川◆そうです（笑）。恥ずかしいですよ。

村田◆絵がお好きなんですか。

並川◆いやいや、まあ別に（笑）。（会場から拍手）

村田◆お若いときから絵をかいていたのですか。

並川◆いやいや、もう、ぜんぜん。

村田◆病気になってからですか。

並川◆病気になってからね。

村田◆紫色をよく使っておられますね。

並川◆好きです。大好きです。

村田◆好きなんですね。

<おきた、ハガキを紹介>

おきた◆並川さんがつくられた絵ではがきを作って、売っているんだよね。

並川◆そう（笑）。

村田◆それはパイナップルですか。

並川◆そうです。

おきた◆はじめ、書くのはいやだといっていたんです。今でもいやだと時々いっていますけど。



並川 由美子 さん

現在 64 歳。平成 17 年に
認知症の告知を受ける。
大阪府在住。

藤編みや、編み物を教えていた。今はアートワークで絵に挑戦中。



並川◆いやなんよ。

おきた◆（笑）でも、書いてみたらかけたんだよね。

並川◆かけましたけど、やっぱ恥ずかしい。

おきた◆ほな、隠しておこか。

村田◆恥ずかしくないですよ。そうやってハガキにして売ったら売れるんですか？

おきた◆一番売れ筋なんです。

並川◆そんな（笑）。

村田◆うれしいでしょう。

並川◆いやいや、けっこうです。私は。

村田◆絵のほかに、あとお楽しみはなんですか。

並川◆楽しみ、って。もうほかにいいんです。自分の好き放題にしとったら。

村田◆お仲間といろいろなお話しをされる。

並川◆ええ。もう。（みんなのところに）きたら、きいてきいて、といろいろ話します。

村田◆そうですか。

並川◆私は、なんというか、ちょっとわすれちゃったけど

おきた◆昔、編み物をされていたんですけど、できなくなっちゃったから、どうしようかなとおもったときに、絵がちょっとね。

並川◆そうね。

村田◆しかし、明るいですね。いつも笑ってらっしゃるんですか。

おきた◆いつも、つっこまれてます、私。

並川◆ええ（笑）

村田◆それでは、お隣の青津さんに伺います。青津さんは千葉県の柏市からお越しですね。青津さんも相当落ち込んでおられた、と。

青津◆そうですね。なんで、と、なんで私がこうなるの、って思いました。

村田◆立ち直ったのはどういうきっかけですか。元気になったのは。

青津◆スイミングとかが好きで。映画も大好きで。そういうので。

村田◆泳ぎが好きなんですね。週にどのくらいいかれるんですか。

青津◆2回くらいかな。

村田◆どういう泳ぎですか。

青津◆横泳ぎとか。横泳ぎって、女の人が子供をこうやって（抱えるしぐさ）やるのがありますよね。子供を抱っこして、いっしょに泳ぐという。

村田◆平泳ぎも。全部泳げるのですか。

青津◆いや、全部というわけではないですけど。

村田◆では健康づくりは、ばっちりですね。

おきた◆そうかもしれない（笑）。

<おきた、写真を紹介>



青津 優子 さん

現在 57 歳。平成 15 年

に認知症の告知を受ける。千葉県在住。

家族仲良くしていきたい。趣味は、水泳、映画を楽しむこと。

おきた◆これはさきほど映像で紹介されていたのですが、埼玉の交流会にいったときに絵本を読んでいる写真がでていたと思うのですが、落語絵本をみなさんの前で朗読したりされているのですよね。

青津◆はい、そうです。

おきた◆地元の本人交流会や、全国の本人交流会で富山にいったときにも落語絵本を朗読したりされているのですよね。

青津◆はい、楽しかったです。

村田◆本人交流会には積極的に行かれていますか。

青津◆そうですね。

村田◆行かれたのは、富山と、、、

青津◆富山と埼玉と、千葉もですね。

村田◆やはり、同じ病気をした方とお話しされるとというのは、楽しいですか。

青津◆そうですね。はい。

村田◆どういう面で。

青津◆病気のことはあまり話さないと思うんだけど。でも、悪いことしてるわけじゃないから(笑)だから、楽しくやっています。楽しくやっているのが一番だと思います。(笑)

村田◆お二人ともデイサービスはご利用されているのですか。

おきた◆青津さんだけです。

村田◆デイサービスは楽しいですか。

青津◆そうですね。はい。

おきた◆ちょっとお年寄りが多いよね。

青津◆それもあるけれど、でもそれもみんなね。

村田◆並川さんは利用されておられないと。

おきた◆並川さんは行ってないよね、愛都の会と歩く会と。

並川◆そうそう。

おきた◆そこでいろいろ話しているんだよね。

並川◆そうそう。

おきた◆自分だけじゃないとね。

並川◆そうそう。よかった。

村田◆なにがよかったと？

並川◆自分だけじゃないなあと。でも、まあ、だんながいろんなことをやってくれていて。

おきた◆それはいつとかなきゃね。

並川◆そうそう (青津とともに笑)

村田◆今日はお二方のご主人がいらしてましたよね。手をあげてください。奥さん、感謝していますよ。

おきた◆二人でどこかに隠れたかもしれない (笑)。

村田◆そうね。

おきた◆こんな形でご本人たちが交流できる場所を身近に一つずつ増やして、並川さんもおっしゃってくれましたけれど、自分だけじゃないということを知っていただいて、絵にとりくまれた

り、プールにいかれたり、いろんなことを積極的にされています。

村田◆本人同士の交流がいかに大切か、ということがよくわかりますね。ありがとうございました。

●5年間をふりかえりながら

村田◆堀田さんにお伺いします。これまでみなさんの活動をいろいろ伺ってまいりましたが、5年前と比べると着実に広がりが出て、5年間の蓄積があると実感しますね。

堀田◆すごい進歩ですね。まず、ご本人の方がこれだけ語ってくださるようになったというのは、5年前は想像つかなか

ったですよ。そして、しっかりしておられますし、したいことがはっきりされておられますし、私とぜんぜんかわらないですよ。私も、このキャンペーンの名称がなかなか覚えられないです（笑）。気持ちも同じですし、恥ずかしがったり喜んだり、ほんとに一緒なんだと。だからご本人に語っていただくことはほんとに一番大事なことですし、みなさんよくわかっていただけると思いますね。

村田◆こうやって壇上にでてきてくださり、思いを語っていただけるのは、本当にうれしいですね。

堀田◆うれしいですね。

村田◆サポーターも150万人、そしてセンター方式も広まり、介護者の会もずいぶんきまかつくられるようになってきましたね。

堀田◆どんどん広がって、しかもしっかりとしたものになってきていますよね。

村田◆あとの5年間でさらに骨太の活動として地域に根付かせていくには、力強さと広がり、両方の面が求められると思いますがいかがでしょうか。

堀田◆そうですね。筋がしっかり通ることが必要です。町は町、家族は家族、施設は施設、とバラバラではだめです。一番基本の芯はご本人の気持ちであり、ご本人もみんなと同じように普通に暮らしていきたい、いろんなことをしたいと思っておられます。これをみんなで大切にしよう、この芯をしっかりと通すことが大事ですよ。ですから、こうした思いをわかっていただくためにも、認知症の方が町に出てこられたら、思いをうけとめてしっかり対応しよう、とか、施設などへ入所されても、センター方式でご本人の気持ちをしっかり伝えよう、とか、介護者の方も大変だけれども、その大変さを一人でかかえず、まわりの助けをもらいながらどうご本人の思いにこたえていくのか、など、こうしたことを乗り越えるための経験や方法を学んでいただければ、「認知症になってもだいじょうぶ」ということになるのではないのでしょうか。

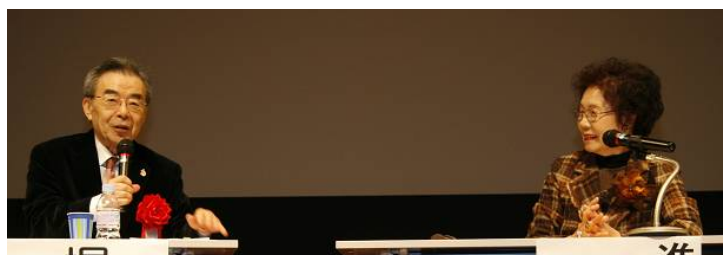
村田◆そうですね。「本人の思い」が抜けてしまったまま、まわりが良かれと思って先走ってやってしまうことがまだまだありますよね。



堀田 力

さわやか福祉財団理事長・
弁護士。100人会議議長。

京都大学法学部卒業後検事になる。法務省刑事局付検事、在米日本国大使館一等書記官を経て、昭和51年東京地検特捜部へ。検事としてロッキード事件等を担当する。その後、法務大臣官房人事課長、法務大臣官房長を歴任。平成3年に退職し「さわやか福祉推進センター（現さわやか福祉財団）」を設立。



堀田◆思い込みはだめですよ。お世話をすればいいんだという考え方もだめですよ。本人の気持ちをどう活かすかということが大事ですよ。

●これからに向けて

村田◆これからの5年後にむけて、皆様方それぞれのお立場から、ひとことずつメッセージをいただきたいと思います。

清水◆これまでの5年を経て、これからの5年にむけ、さらに住みやすい町に貢献していきたいと思います。



村田◆具体的にはどのようにお考えですか。

清水◆今取組んでいることを継続し、つねに前向きに、自分たちが取組んでいることをまわりに理解していただくことですね。認知症はこわくないんだと思ってもらえるように、そして認知症でも普通に生活できるように、自分たちは日々作業の中でそうしたことが支援できるよう、今以上に、住みよい町を目指して協力し、がんばっていききたいと思います。

村田◆ありがとうございます。西村さんはいかがですか。

西村◆一般的なことはいえませんが、私たち家族にとっては、アルツハイマーは病気であり、ほかの病気であれば通常は病院にお世話になるだけなのですが、アルツハイマーは完治薬がないため、福祉関係の方にもお世話になっています。

介護保険のおかげで、私も今日こうして会場に立てることができ、非常に感謝しております。ただ、年間400万円ちかく、妻の介護保険の費用がかかります。10年間では4千万円、これが人数が多ければ何億にもなります。できましたら費用対効果を考え、新薬の開発がすすみ、完治できるまでいなくても少しレベルが下がるものでも新薬ができれば、介護保険の費用低減に役立つのではないかと思います。そうすれば介護保険の費用も過大にならなくてすむのではないかと思います。

もう1つ、センター方式をつかってみて思ったのですが、もし妻が発症した頃に、行政がデイサービスなどの施設にセンター方式などについて情報提供だけでもしていただければ、ずいぶん状況が変わったのではないかと思います。そうすれば、家族と施設が一体となり、さらには地域への理解が広がるのではないかと思います。

村田◆行政にもっと強く役割を担ってほしいということですね。ありがとうございました。

山川さんには、介護者のお立場からお願いします。

山川◆介護をされる方が健やかでいるためには、介護をする方が健やかでいなければいけないですよ。ですから、介護者の疲れた心と身体を癒す場がますます広がって、行政にも理解して協力していただけるように、そしてこうした今日のような集まりが催されるということは、大きなことだと思います。みなさんが認知症になっても安心して暮らせる町づくりを知る機会にもなりますね。今日はこういう機会をいただきましたことを感謝申し上げます。ありがとうございました。

村田◆杉並区のように介護者の会がきめこまかく設定されるような支援が、ほかの自治体にも広がるとよいですよ。

山川◆そうですね。

村田◆青津さん、並川さんからもなにか会場みなさんにメッセージがございませうか。

青津◆病気のことをわかってくれる人がたくさんいるといいと思います。

並川◆おんなじ、おんなじ。(沖田さんへ)今の言うというて。(青津、爆笑)

村田◆手抜きですね。言うというて、って(笑)それは大阪式ですか。

並川◆はい。(会場、笑)

村田◆お二方の気持ちは、もっと病気のことをわかってということですね。ありがとうございました。

村田◆全体をおききになって堀田さんから最後に一言、いかがですか。

堀田◆本人を中心に、皆で支えていこうという動きは形になってきたと思います。あとはやはり、市民後見人ですね。こうした支えがしっかりと取り組みの芯になってはじめて、全体の姿が落ち着いてくるのではないかと思います。

村田◆認知症サポーターだけでなく、市民後見人という、本人を支える市民の方々が増えてくるといいということですね。

大変短い時間でしたが、それぞれの活動に取りくんでおられる方々、ご本人からお話をうかがい、皆様へ皆様へのメッセージをいただきました。このプログラムをこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。



<事務局から来場者へのメッセージより(抜粋)>

キャンペーンの取り組みをされているごく一部の方に、映像でのご出演およびご登壇いただきました。現在全国で、皆様のお近くの町で、認知症サポーター、本人、家族、専門職の人が一丸となった、いろいろな取り組みが進みつつあります。これまでの5年はサポーターを広げ、認知症を知ってもらうことがテーマでしたが、これからは広げるというよりも、多くのご本人・ご家族が普通に暮らしていける、その実現にむけて、今の広がりを大きなうねりにつなげていく展開が求められていると思います。



100人会議会員の皆様、町の市民の皆様、専門職の皆様、そして行政の皆様とともに、それぞれの立場から、そして立場を越えて、これからも一緒に力強くこの取り組みをすすめていければと思います。

また、マスコミの皆様も多くお越しいただきました。認知症に関する報道は少なくないですが、暗く深刻な面だけでなく、それを乗り越えながら動き出していこうとするこうした取り組みをぜひマスコミの皆様にも広げていただきながら、全国の皆様とともに取り組みを広げていければと思います。ありがとうございました。

Ⅱ. 第2部「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009発表会

1. 「町づくり2009モデル」の経過報告

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009実行委員長 本間 昭



『「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009』実行委員長の本間です。

今から6年ほど前になりますが、平成16年に、国際アルツハイマー病協会という、本部をロンドンとし、認知症に関するいろいろな啓発や支援活動を主に開発途上国を中心におこなっている国際的な団体が、アジアでの初めての大会を京都で開催しました。その折に、認知症になってもまわりの人達からうまくサポートをうけることができ、地域がうまく支援することができれば、認知症になっても自分らしく生きることができるというメッセージを発信して、それを実践する地域を支援していこうという発表会が、公式には日本で初めて行われました。その時から数えて今回で6回目ということになりました。

このキャンペーンには全国から55の取り組みがよせられております。そして今まで約6年間に、すべての都道府県から、あわせて346の取り組みが寄せられております。これはホームページにも載せてございますので、すべての活動の状況がホームページでご覧いただけます。

今年のモデル決定については、昨年11月に一次推薦委員会が開催されました。12月に最終の地域活動推薦委員会が開催をされ、今日のちほど報告いただきます7つの活動が、「町づくり2009モデル」として決定いたしました。

認知症ケアにつきましては、まだまだ、さまざまな課題が山積しております。すべての課題に共通していることは、やはり今日、のちほども報告をさせていただきますが、町づくり、地域づくりということにつけるのではないかと思います。地域で生活をしているいろいろな方々が認知症をきちんと理解し、どういうふうになれば少しでもサポートできるのかという認識が広がるのが、とりもなおさず早期発見、早期受診ということにつながりますし、できるだけ早い時期に治療を始め、将来どういうふうに住んでいくことができるのか、ということを考える時間をつくることもつながります。そのことはご本人、ご家族の生活の質、QOLを高めるということにもなります。

ぜひ認知症の人達の尊厳を支えて、彼らとともに暮らしていく町づくりの活動を、今日ご参加いただいている皆様方はもちろんですが、多くの方々のご理解、ご協力を得ながらこれからもすすめてまいりたいと思います。ぜひ、ご協力よろしく願いいたします。

これで経過報告とご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

2. 全国から寄せられた地域活動一覧

(応募先着順)

No.	活動名称	応募者名称	都道府県
1	“ひまわりの町” 北竜の挑戦！～あなたの笑顔が見たいから～	若年認知症家族会 空知ひまわり	北海道
2	認知症にカンパイ！ ～地域の居場所で、輝く人生を～	NPO法人 さわやか徳島 地域の居場所 幸せの家・ありがとう	徳島県
3	ゆかた・帯の寄付のお願い	浦安市健康福祉部介護保険課	千葉県
4	誰でもが安心して暮らせる街に～小樽市高齢者懇談会『杜のつどい』の市民後見人活動～	小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」	北海道
5	手づくりおもちゃ幼老共遊教室	森 依顕(校舎の無い学校)	徳島県
6	世代間交流の試み:キッズヘルパーたちの挑戦	認知症ケア研究所デイサービスセンターお多福	茨城県
7	認知症になっても安心して暮らせる伊万里をつくろう	伊万里地区 認知症の人とその家族の会 通称「ひまわり会」	佐賀県
8	地域と共に生き活きと暮らす～認知症発症者が主になり運営する朝市・地域食堂～	デイサービスセンター侶	香川県
9	医療・保健・福祉の得意分野を生かした実践チームが地域で活躍	南魚沼市福祉保健部福祉課	新潟県
10	「認知症買い物セーフティーネット」普及事業－認知症になっても安心して買い物ができる地域づくり－	NPO法人 HEART TO HEART	愛知県
11	やってみっぺよ地域づくり「高齢者見守り隊」始動！！	福島県いわき市平地域包括支援センター	福島県
12	ネットワーク形式(杉並方式)で「介護者の会」を運営する試み～介護者の心に寄り添える「介護者の会」を目指して～	NPO法人 杉並介護者応援団	東京都
13	人と人をつなぐ、人とまちをつなぐ、「まちのえき」～豊かな交流が認知症を防ぐ？～	NPO法人 山口せわやきネットワーク	山口県
14	「認知症を支える活動へICT(情報通信技術)の活用」～こころ豊かなシニアライフと地域活動活性化にむけて～	光市認知症を支える会(福寿草の会)/NPO法人シニアネット光	山口県
15	楽しく作って、わいわい食べる！認知症の方も楽しく活動するお料理サロン	かけひさろん	東京都
16	アニマルセラピー&音楽セラピー	NPO リトルハンド	和歌山県
17	大人のお手軽地域デビュー作戦！！	川越市地域包括支援センター連雀町	埼玉県
18	日常支援から災害対策まで～地域ぐるみの取り組み～	習志野市谷津西部まちづくり会議	千葉県
19	認知症の方と共に歩み、共に生きる研修会 ～“吹きだまり”の研修～	吹きだまり	愛媛県
20	地域ぐるみで取り組む、高齢者の SOS に届く見守りネットワーク	おおた高齢者見守りネットワーク	東京都
21	認知症の理解から住民参加のまちづくりをめざす羽後町の取り組み	羽後町地域包括支援センター	秋田県
22	地域社会の認知症患者のセーフティネット維持の取り組み	大野 篤志	栃木県
23	地域人材育成(笑いと認知症の理解を地域に広めよう)	有限会社 エーデルワイス	北海道
24	地域福祉の根起こしを地域の人たちとともにはじめよう	社会福祉法人正和福祉会そよかぜの杜/在宅介護支援センターと認知症について語る会「さつき会」(ボランティア団体)	佐賀県
25	その人らしさを中心に置くケア ～もっと自分らしく楽に生きていきたい～	NPO法人 認知症を正しく知る会「もっと らくっと」	山梨県
26	おでかけ SUN 倶楽部	NPO法人北海道外出支援センター	北海道
27	介護事業所の有志の職員が立ち上げた「かまくら認知症ケア研究会」の取り組み	かまくら認知症ケア研究会	神奈川県
28	かまくらりんどうの会 20年の軌跡	かまくらりんどうの会	神奈川県
29	認知症高齢者を地域で支えるために	島根県益田保健所	島根県

30	判断能力が低下しても安心して暮らせる町に	NPO法人シニアメイトサービス	東京都
31	なじみある地域で安心して過ごせる「もう一つの我が家づくり」	社会福祉法人 桜井の里福祉会 生きがい広場地蔵堂	新潟県
32	話・輪・笑って開催「しおかぜ会」	「しおかぜ会」	神奈川県
33	「認知症の家族のつどい」～どンドン広がる輪～	下関市認知症を支える会「キャッチボールの会」	山口県
34	特定非営利活動法人 みつわ	宅幼老所 笑びす	佐賀県
35	特定非営利活動法人PASネットの活動	NPO法人PASネット	兵庫県
36	特定非営利活動法人シビルブレインの活動	NPO法人シビルブレイン	大阪府
37	だれもが不自由なく旅を楽しむ観光バリアフリーをめざして	岩浦 厚信(宮崎市バリアフリー検討委員会 元事務局担当)	宮崎県
38	地域の人も、認知症の利用者の人も、共に活動する「活き活きサロン」	NPO法人シルバーサービス憩いの汀	三重県
39	お互いに助け合える地域づくり 有償ボランティア コープおたがいさま まつえ	おたがいさままつえ	島根県
40	トラベルヘルパーの外出支援活動	NPO法人日本トラベルヘルパー協会/㈱SPIあ・える倶楽部	東京都
41	佐竹台サロン	社会福祉法人 吹田市社会福祉協議会	大阪府
42	認知症になっても安心して暮らせる街づくり～「お父さんごめんさい」から歩き始めた日々～	彩和グループ	埼玉県
43	若年認知症サポートセンター「絆や」	古都の家 学園前	奈良県
44	健康麻雀教室活動による認知機能低下予防事業(いきいき健康マージャン教室)	東内 順子(NPO法人活気会)、堀川悦男(佐賀大学医学部)、十時忠秀(佐賀県医療統括監)	佐賀県
45	明和町に「家族会」を。	明和町介護者の会実行委員会	三重県
46	わが町、飯田でサポーター養成講座、そして、キャラバン・メイト地域づくりにがんばってます	飯田市上久堅まちづくり委員会 認知症疾患医療センター	長野県
47	共生を軸とした認知症地域支援の取り組み～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～	NPO法人 地域の寄り合い所 また明日	東京都
48	熊本県における行政・関係団体・県民が一体となった認知症でもだいじょうぶなまちづくり	熊本県 健康福祉部 高齢者支援総室 認知症対策・地域ケア推進室	熊本県
49	認知症を受け入れるということ～若年性認知症をかかえる夫妻と支援者との出会い～	富士宮市サポートチーム/佐野 光孝・明美	静岡県
50	ご近所を結ぶ「こまちゃん宅福便」	社会福祉法人 駒ヶ根市社会福祉協議会	長野県
51	自立と尊厳を保ち、安心して住み続けることのできる地域へ～ホスピスケアの理念を共有した「ケアタウン小平」の取り組み～	NPO法人コミュニティケアリンク東京	東京都
52	サロン・コミュニティカフェを通じた地域の支えあい、助け合い活動	NPO法人 フェリスモンテ	大阪府
53	お年寄りの“自分語り”に寄り添い、元気を！－傾聴ボランティアのめざす住みよい町づくり－	傾聴ボランティア佐賀かたらい	佐賀県
54	第一歩が踏み出せた！わが町も「安心して暮らせる町」に変身中	社会福祉法人江北町社会福祉協議会	佐賀県
55	つながれた人の輪を継続的に支援し、あきらめない地域づくり	甲府市地域包括支援センター奥湯村園	山梨県

3. 「町づくり2009モデル」表彰

表彰：「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009実行委員長 本間 昭

受賞：

「誰もが安心して暮らせる街に
～小樽市高齢者懇談会『杜のつどい』の市民後
見人活動～」

小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」

(北海道小樽市)

会長 川脇 光男



受賞：

「地域と共に生き活きと暮らす
～認知症発症者が主になり運営する朝市・地域
食堂～」

社会福祉法人 守里会

デイサービスセンター侶

(香川県高松市)

理事長 松木 香代子



受賞：

「『認知症買い物セーフティーネット』普及事
業－認知症になっても安心して買い物ができる
地域づくり－」

NPO法人 HEART TO HEART

(愛知県東海市)

理事長 尾之内 直美



受賞：

「ネットワーク形式（杉並方式）で『介護者の会』を運営する試み
～介護者の心に寄り添える『介護者の会』を目指して～」

NPO法人 杉並介護者応援団

（東京都杉並区）

理事長 北原 理良子



受賞：

「共生を軸とした認知症地域支援の取り組み
～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～」

NPO法人 地域の寄り合い所 また明日

（東京都小金井市）

代表理事 森田 眞希



受賞：

「熊本県における行政・関係団体・県民が一体
となった認知症でもだいじょうぶなまちづくり」

熊本県 健康福祉部 高齢者支援総室 認知症
対策・地域ケア推進室

（熊本県）

同認知症対策・地域ケア推進室長 本田 充郎



受賞：

「認知症を受け入れるということ
～若年性認知症を抱える夫妻と支援者との出会い～」

富士宮市サポートチーム／佐野 光孝・明美

（静岡県富士宮市）

富士宮市役所 福祉総合相談課

主事 村瀬 裕美子



4. 「町づくり2009モデル」7団体による発表

<発表とインタビュー>

◇各発表者には、活動発表の終わりにインタビューにお応えいただきました。

掲載されている「発表資料(プレゼン資料)」は、100人会議のホームページでもご覧いただけます。

町永 俊雄（まちなが としお）

NHKキャスター。「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2009 地域活動推薦委員。

東京都生まれ。1971年NHK入局。

青森、岡山などの赴任地を経て、「おはようジャーナル」「くらしのジャーナル」キャスターとして、家庭、教育、健康、福祉といった生活にかかわる幅広いテーマを担当する。

その後、「ETV特集」「金曜アクセスライン」キャスター、

現在は「ETVワイド」「福祉ネットワーク」などの番組でキャスターとして活躍。

<会場での展示>

◇各発表者の発表資料および関係資料を会場で展示しました。また閉会后には、各発表者への質問コーナーを設置しました。



1 「誰でもが安心して暮らせる街に
～小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」の市民後見人活動～」



小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」（北海道小樽市）

発表者： 会長 川脇 光男

高齢化率の高いわが街では、自分たちの生活は自分たちで守らなければならないとの思いがあり、それが市民後見活動への取り組みのきっかけでした。地域をつくっていくのは、自分たちの役割です。600人の会員の力を結集してこれからも活動をすすめようと思います。

インタビューから.....

町永 ◆ 高齢化率が 30%を超えるため、やはり市民後見人が必要だとお感じになりましたか。

川脇 ◆ 高齢者、特に認知症の方が増えているため、成年後見が必要だということが、はじめのうちはなかなか実感できませんでしたが、講座をうけているうちに実感してきました。

町永 ◆ 成年後見人制度というのは、わかってもなかなか複雑で難しいと感じませんでしたか。

川脇 ◆ 一般の方にはわかりにくいですね。なかなか具体的な認識まではいらないと思います。

<副会長 若西さん登壇>

町永 ◆ 市民後見人を養成する活動で、一番工夫したところ、苦労したところはどんなところですか。

若西 ◆ ほとんどないです。専門家の方が一所懸命にひっぱってください、それにひっぱられて活動を続けられました。そういう点ではとても恵まれていると思います。社会福祉士の方など、実際に成年後見相談を受けておられる方が将来、成年後見が行き詰るのではとの危機感を持たれていて、なんとかしようという思いで一緒に始めました。

町永 ◆ 実際の生活者の立場と、専門家の方のなんとかしなきゃという思いが重なり、活動が始まったということですね。皆さんが専門家とともに行政に働きかけて成年後見センターもできるそうですが、大きな成果ですね。

川脇 ◆ そうですね。(2010年)4月1日からスタートします。むしろ、これからです。

町永 ◆ 成年後見制度にかかわる認知症の方の相談がでてくると思いますが、心構えはいかがですか。

若西 ◆ 市民後見人をきちんと養成し、確保し、しっかり活動に結び付けていくことがこれからの一番大きな課題だと思っております。

町永 ◆ 全国の成年後見制度を自分たちの手でやろうという方々へ、アドバイスをお願いします。

川脇 ◆ 市民自らが市民後見人養成講座を実施することが理想ですが、なかなかそれは難しいです。専門家の方々のお知恵をいただき、市民の方が勉強することが必要ではないでしょうか。どういう方向性にもっていくか、というところでは、行政との関わりも必要ですね。

町永 ◆ センター設立もその一つですね。ありがとうございました。



● 「町づくり2009モデル」推薦理由●

- ・ 高齢者が“自らの問題”として認知症の理解や成年後見制度の必要性を捉えて活動していることが大変素晴らしい。成年後見制度が開始されてから10年、特に認知症の人にとってこれらは大切な制度であり、市民の立場からの学習・養成講座、後見相談の取り組みはとても重要である。
- ・ 市民にはなじみにくい課題であるが、市民が中心となって行政、専門職を巻き込み、啓発だけでなく、市民後見を実際の活動としていくための道筋を作っている着実なプロセスを他地域でもぜひ参考にして欲しい。
- ・ まさに、市民の市民による市民のための市民後見の実現が期待でき、今後の更なる飛躍や全国的な普及が楽しみな活動である。

[発表資料]



誰でもが安心して暮らせる街に

～小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」の市民後見人活動～

北海道開拓の拠点 漁業・農産物・石炭等輸出・国際商業都市としての貿易港。政治経済産業の要として発展
すべての機能の縮小や廃止。人口流出が続き、衰退
運河埋め立てに反対する市民運動が、全国に広がりを
運河は半分を埋め、敷設路が整備され、多くの観光客が訪れている



2. 「杜のつどい」の紹介

2005年 高齢者を中心に、健康的な生活、街の活性化、住みよい社会づくりを目的に活動を開始。
「敬老の日健康を祝う会」「年末餅つき大会」など全体事業。講演活動14講座。延べ43,200人参加。
2006年 「認知症予防教室」が市の委託事業に、「子育てひろらんど」が協働事業に、44講座。
延べ参加者9,000人。会員数は400名。
2007年 「倉下秋時の子供の安全見守り」「千年の森」など社会参加活動。市民後見人養成講座が始まる。
50講座。延べ13,000人参加。会員は559人。協賛団体は16団体。
2008年 WAMの助成で「市民後見人活動センター」事業。「湯まつり」「雪明りの路」など街のイベントに参加。
講座は74講座。延べ参加者6,000人参加。会員数は1,599人。
2009年 新たに「健康マージャン」が加わり、男性会員が増加。高齢者施設訪問活動、施設見学、文化の継承、
世代間交流、街のイベントなどに参加。現在71講座。会員は620名。

～64歳	122人	21%
65～74歳	258人	44%
75歳～	191人	32%
不明	18人	3%
会員数	589人	



4. 2008年度の市民後見人センター事業の活動

2008年3月、WAMの助成が内定。会費で運営実行委員会を組織しプログラム化。正式決定5月。

- 啓発事業
「敬老の日祝賀会」で「梅さんが成年後見を受けるまで」の寸劇。400人参加。
「市民講座」を開催。同じく「梅さん」をテーマにしたディスカッション。250人参加。
「梅さん劇団」は、出演講座で大活躍。市民講座のチラシ1万枚は、会員が近隣に手渡し啓発。
- 市民後見人養成講座
第1回 市民後見人養成基礎講座（7～10月）2月初回講座受講生対象 21時間（修了16人）
第2回 市民後見人養成初級講座（11月）一般公募 18時間（修了20人）
第2回 市民後見人養成基礎講座（2月）第2回講座受講生対象 21時間（修了18人）
- 講座修了生を中心とした「継続学習講座」を開催。
「地域権利擁護事業」「医療制度・後期医療制度・介護年金」
「高齢者と最近の憲法」「任意後見」「任意後見制度」
「認知症と診断されたら」「自立支援法と障害者の暮らし」
「孤独死を考える」「裁判員制度」。
- 他機関との連携。
「後見センター検討会」を専門家に立ち上げ、月1回の検討会。
隣町余市市との市民後見人養成研修の計画連携。
障害センターと広域総合後見サポートシステムに向けて協力。
「後見センター」設置「提言書」をまとめる。
- その他
先行地の視察法人後見を行っている南富良野町の視察。
アンケートなど。



5. 「小樽市民後見人の会」の発足

第1回目の実践講座修了生の有志で、11月「小樽市民後見人の会」を組織。

- 後見相談
毎月1回第3土曜日午後。担当者2名。専門家に学びながら対応。
- 自主勉強会
「個人情報保護」「介護保険制度」「相談シート」「相談の仕方」
「相続」「家族・親族」「虐待」「民生委員」「自立支援法・生活保護」
など 実力アップと意欲の維持を目的。

6. 「報告書」と「提言書」、活動のまとめ


これら一連の活動を「報告書」と「提言書」にまとめる。
「報告書」はWAMに提出。
「提言書」と「報告書」は、2009年4月専門家と共に小樽市に提出、説明を行なう。

提言

- 公的な成年後見センターの設置を要望
- 権利擁護の必要性
- 後見制度の利用促進
- サポートの必要な人の増大
- 市民の助け合い

各種アンケートの意見から

- 認知制度の啓発普及が必要
- 現状認識をした
- 後見人の必要性と役割、重要性が分かった
- 市民後見人としてすべきことがたくさんある
- 自分が役に立ちたい

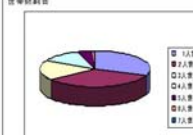


1. 小樽市

人口流出と急速な高齢化 2009年高齢化率30.9%超 一人一高齢二人世帯は60% 生活保護受給率の高さも36%超

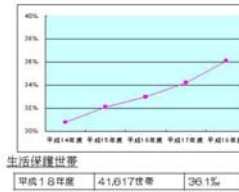
【年代別人口推移】（一部概数） ≪ 小樽市統計資料より作成 ≫

性別	年号	～14歳	15～64歳	65～	合計
1998/12	平成10年	18,000人	103,000人	34,000人	154,500人
2003/12	平成15年	16,000人	93,000人	38,000人	147,000人
2008/12	平成20年	14,000人	82,000人	41,000人	137,000人
2009/12	平成21年	13,444人	79,902人	41,424人	134,770人
構成比率	平成21年	10%	60%	30.74%	
世帯数	67,756世帯		住民登録人数	136,446人	



【高齢者単身者数】 平成17年10月(国勢調査)

年齢	男	女	計
65～69歳	810人	1,216人	1,726人
70～74歳	421人	1,643人	2,064人
75～79歳	360人	1,723人	2,083人
80～84歳	260人	1,236人	1,496人
85歳～	196人	723人	919人
計	1,747人	6,541人	8,288人



生活保護世帯
平成18年度 41,617世帯 36.1%

3. 成年後見制度への取り組み2007年度

2007年7月、「市民後見人養成講座」の実施団体に立候補。決定は11月。
「高齢社会NGO連携協議会」助成「ルネサンス財団」協力事業
《会員の増加と、社会貢献活動などの拡大から、いろいろな勉強を深めていった》
《高齢化率30%に近く、自分たちの生活は自分たちで守らなければならないと考えた》

地域の専門家に講師を依頼。講師会議で市民後見人の活動には法人格が必要との助言・指摘。
市の担当係からWAMの助成申請を提案。次年度の活動を計画し10月に申請。内定は3月。

2008年1・2月に第1回「市民後見人養成講座」実施。受講者45名。
リーガルサポートシンポジウム「市民後見人の未来と課題」に参加。(東京・1月)
「世田谷後見センター」「多摩南部後見センター」視察。(1月)




市民講座風景
「梅さん劇団」結成
以後、あちこちから出演依頼。

7. これからの「杜のつどい」

2009年 「杜のつどい」は「市民後見人活動センター」と「小樽市民後見人の会」が連携し
「市民後見人養成講座」「後見相談」「自主勉強会」などの諸活動を継続している。


2010年4月1日 小樽市と近隣5町村との「小樽・北札幌へ成年後見センター」スタート予定。
《 補足・問題点 》

- 小樽市の「成年後見申立て件数」は、平成17年申立て新規20件に対し18年39件と倍増。
- 提出された後見の報告書の数は、59件から114件とほぼ倍増。
- 小樽市における市長申立て件数は、平成18年1件、平成19年度は8件、平成20年度は8件。
- 近隣関係が希薄で、孤立化の傾向。訪れる民生委員をも拒み自分から発信することを止めてしまう。
- 孤独死年間相当数発生。
- 高齢者の3人に一人、或いは2人に一人が認知症？
- 身寄りのない認知症高齢者や、親族の協力が得られない時、市長による成年後見申立てができる。
- 住み慣れた地域で、日常生活を維持する、隣近所の手助け合い。

8. 私たちの計画

- 見守りと安全安心の生活のしくみ。
- 高齢者の経験と知恵を活かすこと。
- 行政との協働や働きかけを。

地域を作っていくのは、自分たちの役割である



2 「地域と共に生き活きと暮らす ～認知症発症者が主になり運営する朝市・地域食堂～」

社会福祉法人 守里会 デイサービスセンター侶（香川県高松市）
発表者： 理事長 松木 香代子



認知症の方はとても豊かな感性をお持ちです。困っている方がいれば手をさしのべてくださいます。しかし、これは家族や地域の方になかなかみえないことがあります。そこで私たちはそれが家族や地域の方にみていただくためにも、本人に自信をもってもらい、そこから今まで見えなかった姿がみえるようにしたいと考えました。

インタビューから.....

町永 ◆ 地域食堂と朝市、繁盛しているようですね。地域の方も楽しみにしていて、開店をめぐして来る方もおられるのですか。

松木 ◆ 安くていいものばかりですから、雨が降っても来てくださいます。

町永 ◆ 特に讃岐ですから、うどんですね。「侶うどん」というのがあるんですね。うどんが鉢の中で暴れているから、暴れん坊將軍のようなうどん、とブログにもありましたが、いかがですか。

松木 ◆ 讃岐うどんは、麺が立つと縁起がいいといわれているのですが、うちのはいつも立ちます。それがいいのかなと思います。

町永 ◆ 活動のタイトルにもあるように、こちらは認知症発症者が主に運営するということだそうですが、たとえば、計算だとか手順だとかおぼつかなくなってしまうような時など、ふだんのようにサポートされているのでしょうか。

松木 ◆ 職員よりも皆さんのほうが支出とか収入について一所懸命に、熱心にやったださって計算してくれます。すごいです。

町永 ◆ そうした姿から、逆に職員のほうが改善点を見つけていくということですか。

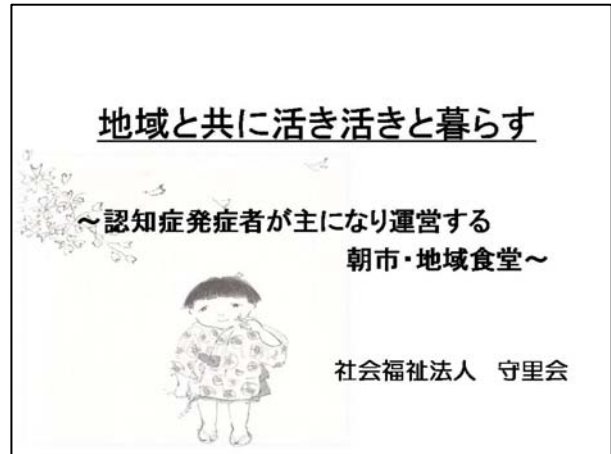
松木 ◆ そうですね。たとえば、買い物に来た方が、つついホウレン草など 100 円の安いものを買おうとされたところ、ゆず大根の漬物などをおすすめしたりされます。そういったところがとても一所懸命で、みていて本当にうれしいです。

町永 ◆ 自分でやったことがお金という手ごたえになるので、良い方向に
いっているのかもしれないね。ありがとうございました。



● 「町づくり2009モデル」 推薦理由 ●

- ・ 認知症の人たちが主体的に地域の役に立ちたいと取り組んでいる、自分たちで生産した野菜による「地域食堂」や地域の人も加勢する「朝市」の開催等を通して、笑顔を取り戻している取り組みはもと全国に広めたい活動である。
- ・ 小規模事業者として介護保険事業に留まらずそれらを拠点に独自の取り組みをしている姿勢は、他の事業者にも影響を与えられる活動のモデルである。最期まで地域社会の一員として暮らすことができるこのような活動が、全国各地で展開されていくことが期待される。
- ・ 「楽しくて幸せな食事」を目指している活動は、若年認知症の人をはじめとした人たちが現役としての実感を持つとともに、人との関わりの中から生き生きとした姿が生み出されており、大変素晴らしい。





(発表より)

パーキンソン病を患い、発作が出ると一人こもりがちだった方が、認知症の方の優しい気遣いによって自分をいとおしむような姿をみせてくれるようになりました。

取り組んだ背景

- 認知症の方の思いや力を形にしたい
 - ・豊かな感性
 - ・生活力
 - 等
- 地域と施設の垣根を取り払いたい
 - ・隣近所と付き合っているような関係
 - ・認知症への理解

活動内容

- 地域食堂
 - <参加者>
 - ・地域住民
 - ・老若男女
- 朝市
 - <出荷者>
 - ・地域高齢者
 - ・施設利用者

今後の取り組み

- 3年毎に改訂になる介護保険制度がより良く変わっていくきっかけになるように
- 介護保険制度を多様に活かす



3 『認知症買い物セーフティネット』普及事業 —認知症になっても安心して買い物ができる地域づくり—

NPO法人 HEART TO HEART (愛知県東海市)

発表者： 理事長 尾之内 直美



これまで買い物支援は、買ってきてあげますよ、一緒に行ってあげますよ、が多かったと思いますが、買い物は日常生活に密着したものであり、その生活の一部を見守るネットワークを地域につくろうと取り組み始めました。認知症の方がレジでお支払いに時間がかかっている時でも後ろに並んでいる人がイライラしないということも、大事な地域づくりだと思います。買い物のトラブルは、認知症の初期から始まりますので、このネットワークは今後、徘徊ネットワークとしても機能していくのではないかと期待しています。私たちのまちだけでなく、全国に店舗をもつ大型店舗さんやさまざまなまちに賛同いただいて、一緒になって取り組んでいただけるようご協力をお願いいたします。

インタビューから.....

町永◆家族の声から始まった大変具体的な取り組みですが、これがうまくいくかは、一つにはお店の対応ということがありますね。実際にいかがでしょうか。

尾之内◆従業員の方の研修をお願いされるなどお話をいただいておりますので、まず地元の店舗から、そしてうまくいったらほかの地域の店舗へご協力いただけるということが、今すすんでいます。

町永◆成果はでていますか。たとえば、認知症の方が買いものにいったらとも対応がよくなったという声はよせられているのでしょうか。

尾之内◆今はまだお店のアンケート調査をさせていただいております。お店というよりも、従業員の方の意識調査ですね。実際にどのくらい認知症に対して関心があるかとか、知っていच्छるかとか、それにあわせて学習をどういうふうにしたらよいかというのを伺い、お店と一緒に考えていきたいと思っています。

町永◆このマーク(買い物安心マーク)は、お店に掲示されるんですか。

尾之内◆そうですね。今、デザインを考えておりますので、のぼり旗で掲げていただく予定です。愛称を募集しますので、ぜひみなさんお願いします。

町永◆クエッションマークがあるところがいいですね。愛称募集も一つの啓発活動ということですね。

尾之内◆はい。そう思っています。またよろしくお願いします。

町永◆これは認知症の方だけでなく、高齢者や子供、だれにとっても優しいまちにつながりそうですね。

尾之内◆そうですね。マンガの日向明太郎じいちゃんにも活躍してもらいたいと思っています。



● 「町づくり2009モデル」推薦理由 ●

- ・ 日常生活に欠かせない身近な「買い物」を通して、地域の中での認知症の見守りのネットワークづくりが進められており、先駆的で重要な取り組みである。ケアは日常生活の中にあるという大切なメッセージが伝わってくる。
- ・ 「買い物安心マーク」というアイデアがおもしろく、それらを実質的な活動とするためのDVDや冊子の作成を通して、商店や住民への認知症への理解が広がり、認知症になっても安心して暮らせる町づくりの第一歩が着実に進められている。
- ・ 家族の会が行政や社会福祉協議会を巻き込みながら、行政内部でも横断的な取り組みが進められている点が評価できる。さらに、実行委員会形式をとりながら常に住民参加を促すことで、継続的な活動が進められている点が素晴らしい。
- ・ きめ細かいプログラムが他の参考となり、全国の「買い物の場」で取り組むことが可能なモデルである。ぜひ各地で取り組んでほしい。

「認知症買い物セーフティネット」普及事業
 一認知症になっても安心して買い物ができる
 地域づくり

特定非営利活動法人
HEART TO HEART
 理事長 尾之内直美

きっかけは家族の声

認知症が始まると様々な買い物トラブルが起こる
 ◇同じものを幾つも買ってくる ◇お金が上手に払えない
 ◇ちよつと目を離したら居なくなってしまう……などなど

お店や地域の人に認知症の人の買い物トラブルを
 ①知ってもらいたい ②理解してもらいたい
 ③協力してほしい
 ……目印が欲しい

買い物を通して、認知症の人を見守る支援のネットワークを作ろう!!

実態は？ 認知症の人と家族の会・愛知県支部
 アンケート調査結果 会員624名…返信208通(有効回答数152)

◇どこで買い物をする?…自分の足で行ける地域の店舗が多い
 1. スーパー 2. コンビニ 3. 個人商店

◇買い物の頻度は?…60%以上が週1回以上は買い物に行く
 毎日 7-8% 週に5, 6回 7-8% 週に3, 4回 11-8%
 週に1, 2回 35. 3% 月に1, 2回 13. 8% まれに13-8%

◇所持金は?…千円までが30%、一万円以上も20%
 ~1000円 29. 4%~3000円 9. 8%~5000円 19. 6%
 ~10000円 17. 6% 10000以上 21. 6%


◇買い物は誰と?…認知症の人が一人で買い物に行く頻度が高い
 ほとんど一人 15. 7% 一人と同伴が半々 29. 4%
 ほとんど同伴 31. 4% その他23. 5%

●専門職の回答者(46名)
 買い物トラブルを体験・または相談されたことがある 78%

分析・認知症介護研究・研徳大府センター

取り組みの経過

- ①買い物部会発足(NPO法人内)
- ②東海市へ「買い物セーフティネット」の提案と協力依頼
 東海市(市民協働課・保健福祉課・商工労働課)
 社会福祉協議会 の支援連携の了解を得る
- ③実態調査(アンケート)の実施
- ④「実行委員会」の発足…取り組みを進める核づくり
 コミュニティ…老人会・商工会・社協・家族会・学識経験者
 等により組織
- ⑤「意見交換会」の開催…
 情報の共有・顔の見える関係を
 大型スーパー(4ヶ所)・
 商工会議所・介護家族・
 施設職員・市役所(3課)



2008年11月
 認知症買い物セーフティネット実行委員会


⑥マークの公募 ⑦マーク決定…選考委員会実施




⑧マーク表彰式・認知症講演会の開催




認知症買い物安心マーク (愛称募集中)



⑨DVD制作
マンガで学ぼう認知症冊子づくり




日向 明太郎 (ひなた あたろう)
 じいちゃんが活躍

住み続けたい東海市「協働と共創のまちづくり」に向けて

- ⑩認知症メイト養成講座の実施(東海市主催)
 平成22年1月22日・23日実施 150名メイト誕生
- ⑪各店舗・地域でのサポーター養成講座実施による普及活動
 <お店との連携>
 ★商店や店員さんの認知症に対する意識調査の実施
 ★マーク掲示…モデル店から実施し、他店舗へ普及
 <地域住民・他団体との連携>
 ★実行委員会メンバーの増員 ★キャラバンメイトとして活躍
 <行政>
 ★22年度協働事業として啓発講演会・出前講座の開催
 <介護家族> <NPO>
 ★キャラバンメイトとして活躍 ★事務局的角色を担う

4 「ネットワーク形式（杉並方式）で『介護者の会』を運営する試み～介護者の心に寄り添える『介護者の会』を目指して～」



NPO法人 杉並介護者応援団（東京都杉並区）

発表者： 理事長 北原 理生子

介護者サポーターは介護者の心に寄り添える支援を目標としており、専門職からの助言・指導を受け、質を高める努力もしております。介護される人と、介護をする人、両方を支援してこそ、介護家族支援ではないでしょうか。今日をきっかけに、介護者を支援することの大切さに、気付いていただければと思います。

インタビューから.....

町永 ◆ 応援団の皆さんが今日は大勢お越しですが、皆さんの帽子のグリーンは応援団のカラーですか。

北原 ◆ 杉並区は緑が多いことからパンフレットなどに緑を使っています。

町永 ◆ 皆さんの活動は杉並方式といわれていますが、皆さんが呼び名をつけたのですか。

北原 ◆ そうではないです。介護者の会は全国に多くありますが、介護者サポーターを派遣して、ネットワークをつかって支援するというやり方は珍しく、他地域から「杉並方式」と呼ばれるようになりました。

町永 ◆ 介護家族の方がつながる家族会というのはたくさんあるけれど、そうじゃない人も介護者を応援しようということですね。介護をされる本人はもちろんですが、介護者支援をなぜ考えたのでしょうか。

北原 ◆ 私は平成5年から在宅支援にかかわり、ご家族からの悩みを相談される中で気づいたのは、介護者を支援するといろいろなところで効果があらわれることでした。気持ちが晴れて家にもどり良い気持ちのまま介護をする、そうすると介護をされる方も良いケアをされる。みんなに良い影響がでます。介護者支援というのは、介護者だけの支援にみえてしまいがちですが、この中にあらゆるものが含まれるのではないかと思います。

町永 ◆ 北原さんの介護体験で、介護者が悩み、辛さをなかなか言えないことがあったということでしょうか。

北原 ◆ そうですね。私自身もうつになっていたことがあったのですが、うつになっているときは自分では気がつかない。介護ではトラブルはつきものですが、ほとんど身内にからみまます。ずっと引きずって生きていかなければならない、そうした辛さを、せめて自分たちの子供の代にはもっと軽くしたい、子供にはさせたくないという思いでした。

町永 ◆ まさに介護者応援団ですね。今日は、介護者の本人も、行政の方もいらっしゃるそうで、心強いですね。行政は介護者支援という発想がなかなか薄いですよ。

北原 ◆ 私たちはスタッフと一緒に、何度もお願いしに行き、行政も根付けたのだと思います。

町永 ◆ 当事者の側から動かないといけないのが現状ですよ。緑のキャップの皆さん、がんばってください。



● 「町づくり2009モデル」推薦理由●

- ・ 介護者を支援することの大切さが言われながらも、その仕組み作りは残念ながら遅れている。そういう状況の中で、継続への道筋を示してくれている素晴らしい活動である。NPO が介護者を支えるために継続支援活動を行っており、専門職、行政との連携を図りながら支援ネットワークを作っており、関わる人たち全てに意義ある活動となっている。何よりも「介護者の心に寄り添う」あり方が素晴らしい。
- ・ 孤立しがちな介護家族を支えようとする「介護者応援団」の取り組みは、今後急速に高齢化の進む「都会」でのネットワークのあり方として学ぶべきところが多い。
- ・ 介護者の精神的支援や介護力の向上に寄与する支援が行われており、さらなる発展が期待できる。
- ・ いろいろなボランティアの参加と支えにより実現可能な活動である。特に地域の潜在力を活かし、それが参加者自身の介護予防にもなっている点が素晴らしく、全国で取り組まれることが期待される。

ネットワーク形式(杉並方式)で「介護者の会」を運営する試み

～介護者に寄り添える「介護者の会」を目指して～



 NPO法人杉並介護者応援団

杉並介護者応援団とは①

H18.3 設立
H21.2 NPO法人化

杉並介護者応援団
会員数: 正会員 25名
賛助会員 10名

開催 (区からの委託)
サポーター派遣
立上げ・運営支援 (区からの委託)

介護者の会
連絡会
↑
(区内10ヶ所)
介護者の会

【事業内容】

- ミニデイサロン
- 介護者、地域住民向け講座・講習 (区から一部委託)
- 介護者応援ボランティア養成研修 (区から委託)

杉並介護者応援団とは②

大学教授、看護師、社会福祉士、臨床心理士等専門家
杉並区
コンサルテーション
スーパービジョン
委託
サポート
介護者の会 (区内10ヶ所)

協力・支援
協力・支援

社協、社会福祉士会、NPO団体
町内会、民生委員、地域支援者
地域包括支援センター(ケア24)
通所介護施設

介護者の会のサポート



- 介護者の会とは…
月1回程度集まり、介護状況や心のうちを話し・聴きあひ情報交換を行う
- 杉並介護者応援団からは…
介護者の会に、サポーターが参加。会のファミリーや継続のための運営サポート等を行う。

ミニデイサロン

地域の方が講師として活躍



実施場所: 浜田山、萩産

- 介護者と要介護者がお茶を飲みながらおしゃべり・日舞を基本にした舞踊体操・歌唱などでリフレッシュ
- 地域支援者の参加を呼びかけ、支援のネットワークをつくる

介護者、地域住民向け講座・講習会



自然素材を使ったクリスマスリースづくり
地域の方へ向けて啓発のための講習会



しばし日常を離れ茶道の時
落語で笑ってリフレッシュ!

認知症サポーター養成講座 (地域の方に向けて・高校奉仕の授業など)

認知症模擬演技による演習



都立高校にて、「奉仕の授業」を担当

いまこそ! 絆

円滑なコミュニケーションの流れを創ろう。

私たち「杉並介護者応援団」は、

- 介護者の方たちと、絆を持ちたい。
- 介護者家族の皆さんと、絆を持ちたい。
- 行政の方たちと、絆を持ちたい。
- 各専門機関の方たちと、絆を持ちたい。
- 地域住民の方たちと、絆を持ちたい。

 NPO法人 杉並介護者応援団

5 「共生を軸とした認知症地域支援の取り組み ～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～」

NPO法人 地域の寄り合い所 また明日（東京都小金井市）
発表者： また明日デイホーム 管理者 森田 和道



専門施設がすべての問題を解決するのではなく、地域に暮らす方々自身が、再び地域社会の「支え合う力」の担い手となることで問題が解決に導かれるよう、側面から支援していますが、それもこうした場を提供することに支援して下さった大家さんや、いつも声掛けして下さるご近所の皆さん、行政の方々が私たちの心に耳を傾けて支えて下さったからだと感謝しています。

インタビューから.....

町永 ◆「また明日」というのは、なつかしいような、あったかいネーミングですがこれはどういう意味ですか。

森田 ◆どんな方にも明日は必ず訪れる、また明日あいましょうという思いと、さらに、いろんな悩みをかかえている人にも、また明日もくるんだ、がんばろう、と前を向いていただけたらという思いでつけました。

町永 ◆先ほど奥様が表彰をうけておられました、ご夫婦と一緒にやっておられるというのはいいですね。森田さんはもともと福祉関係のお仕事をしておられたのですか。どういう思いで取り組みを始めたのでしょうか。

森田 ◆小金井市で他の法人に所属した時も含めると、20年近くになります。特別養護老人ホームに所属していた時、専門施設では介護が必要な方と介護をする側、その二者の関係の中で、介護が必要な方はずっと与えられる立場にいたると感じました。そういう中でも、介護が必要な方がふとみせる底力、人間力がもつとつ活かされる場が必要ではないか、と考えたのがきっかけです。

町永 ◆与えるだけでなく、ともに支えあう、と、森田さんは、作りあげたサービスを提供するのではなく、寄り合い所という環境を設定したということがユニーク(独特)だと思うのですが、実際に取り組んでみていかがでしょう。

森田 ◆まだまだ不十分ですが、“こんにちはー”といらっしゃった方々と、デイサービスの認知症の方々が“いらっしゃい、今日も来たの”と声がけしているのを見ると、これがもつと街中でも広がればいいなと思います。

町永 ◆小金井市のようなところでは、住んでおられる方がサラリーマン世帯が多いため、なかなか地域のまとまりを持ちにくいとききますが、いかがでしょう。

森田 ◆古くから住んでおられる方と、新しく越してこられた方が積み木細工のように分在していますが、古くからお住まいの方々が新しい方に皆でこの町を良くしていこうと上手に声をかけ、お祭りなどを中心にかなり地域がまとまっているように感じます。

町永 ◆新たにつくるのではなく、地域にもともとあった力もうまく導入というか組み込まれたわけですね。発表にもありましたが、認知症のお年寄りの力って大きいですね。


森田 ◆認知症だから、これはできる、これはできない、ではなくて、どんな方でも認知症の方でも、その存在自体が大きいのだと、その存在を感じられる場所になればと思っています。そうしたことは小さい子供が一番よく感じて、本当に子供たちには負けますね。



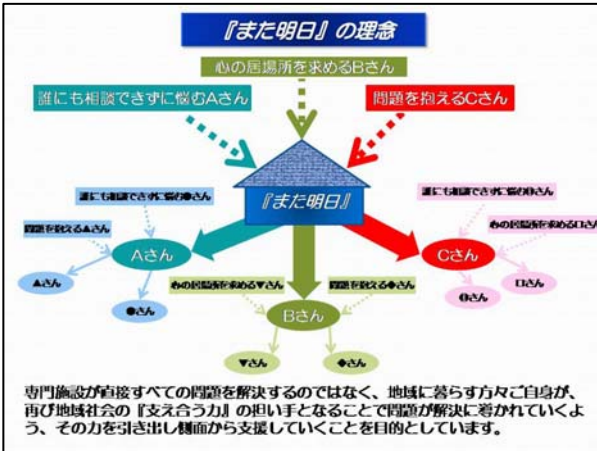
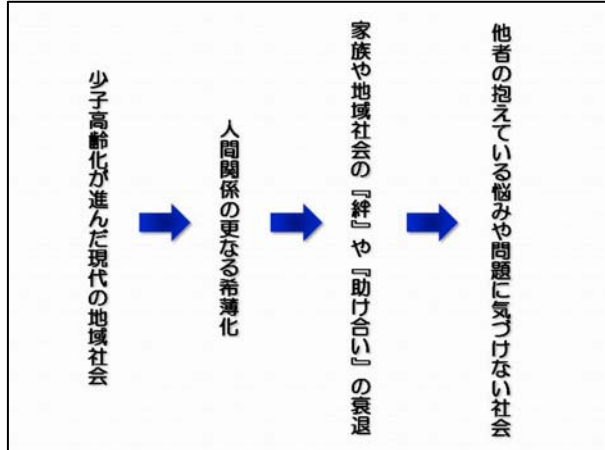
● 「町づくり2009モデル」 推薦理由 ●

- ・ 共生型の試みはだいぶ浸透してきたが、まさに「支援」から「共生」という流れの中で注目できる取り組みである。充実した「与える」サービスより、自然に生まれる「支えあう」力を目指している。多世代交流のための場づくりや様々な工夫があり、これからの地域づくりの上で多くのヒントを与えてくれている。
- ・ 「寄り合い所」「デイホーム」「虹のおうち(保育園)」を同一空間での運営から相乗効果を得ながらも、それぞれに職員が配置され別々の時間が流れるよう工夫されている点が素晴らしい。お茶飲み、おしゃべり、育児の息抜き、主婦グループの会合にも利用されており、地域に暮らす方自身が再び地域社会の「支えあう力」の担い手になるよう支援する仕組み作りのモデルとして全国に広がってほしい。
- ・ 認知症の方々が暮らしやすい場やコミュニティづくりは、子どもやその親たちにとっても住みやすい社会であると改めて考えさせてくれる活動である。

共生を軸とした認知症地域支援の取り組み
～支えられる存在から支え合う力を生み出す存在へ～



NPO法人 地域の寄り合い所 また明日
代表理事 森田 眞希
また明日デイホーム管理者 森田 和道



『また明日』の3つの事業

- ★『寄り合い所』
・・・独自事業の地域開放スペース
- ★『また明日デイホーム』
・・・認知症専門デイサービス
- ★『小さな保育園 虹のおうち』
・・・認可外保育所

『また明日』の3つの事業

仕切りの無い同一空間で
それぞれに職員を配置して、別々の時間が流れるようにし
3つの事業を統括するコーディネーターも配置

自然な関わり合いが具われば自然と生えるように配慮

『寄り合い所』に集う方々

- ★小学生・・・友だち同士誘いあって、隣接する『けやき広場』に遊びに来たついで、医療機関に繋げて内臓疾患の早期発見に至ったケースも
- ★中学生・・・市社会福祉協議会を通じた職場体験、不登校生が新たな進路を見出したケースも
- ★育児中の若い母親と乳幼児・・・息抜きや、誰かに話を聞いてもらいたい・居場所が欲しい。家庭支援センターとも密接に連携
- ★グループ・団体・・・当法人所在地の自治会会合、五隣保育園の親子の会、主婦グループの会合目的、五隣児童館と連携した催し
- ★団体ボランティア・・・五隣婦人会による昼食会、フリースクールの高校生グループ、市社会福祉協議会を通しての体験ボランティア、障がい者団体の紙芝居（引き籠りがちな方の外出の勧誘づけ）
- ★個人ボランティア・・・当初は『寄り合い所』をご利用されていたが、「私にも何か出来ることはないか?」とお申し出下さった方々が半数と、『また明日』の存在を知った市内外の方が半数

関わり合いから生まれたもの

- 過去の人と人の関わり合い
新たな福祉サービスを求めた認知症の方が、過去のご近所づきあいを活用することで、今では「園児のボランティア」として、『デイホーム』に複数回ご利用され、子どもたちに愛情を傾けて下さっている
- 現在の人と人の関わり合い
居場所を求めて『寄り合い所』を訪れていた若いお母さんが、『デイホーム』の密着と関わり合い内に、スーパーで惣菜見かけた『デイホーム』ご利用者とご家族に「いつもこの子を可愛がってもらっています」と思わず声を掛け、ご家族から「住民の中にも親を見守ってくれている人がいる」と安堵を感じたと仰っていただいた
- 未来に繋がる人と人の関わり合い
園児のお母さんから、「要介護状態にある両親（園児には祖父母）に対しての、園児の掛け声を見て、その大切さを感じた」と仰っていただいた

今まで支えられる存在であった方々が、『寄り合い所』での人と人の関わり合いの中で、支え合う力を生み出す存在へと変化された瞬間

今後の課題

認知症になってもだいじょうぶな街は、子どもや社会的弱者と呼ばれる方々は勿論、どんな方々にとっても安心で安全な街であることを広く周知していただくことに努めるとともに、認知症の方々が、そのような街づくりの担い手となっていただけるようにサポートしていくことは、『また明日』の大きな課題の一つです。

6 「熊本県における行政・関係団体・県民が一体となった認知症でもだいじょうぶなまちづくり」

熊本県 健康福祉部 高齢者支援総室 認知症対策・地域ケア推進室（熊本県）

発表者： 認知症対策・地域ケア推進室長 本田 充郎



現場がすぐそばにある市町村さんと、制度をつくる非常に大事な行政である国に対し、県というのはその中間で非常に難しいポジションにありますが、県は何ができるのかということをおなりに考えると3つのポイントがあります。1つめは共通の土台となる場を民間の方々をつくるというプラットフォームづくりで、2つめは大きな方向性を示すこと、3つめは適切な良い情報を示すことです。

インタビューから.....

町永◆発表冒頭で体操をいれていただくなどとてもリラックスさせてくださいました。こういう行政担当者らしからぬ方が担当されるのはよいですね。県レベルの活動がキャンペーンで受賞したのは非常に例外なことだと思います。よく官民一体という言葉が使われますが、うまくいった試しがないと思います。いかがでしょうか。

本田◆連携というのは本当に難しく、核が必要です。では誰が核になるかというみんな腰がひけてしまいます。この核を、行政がしばらく担っていくことが大事で、自然に抜けられるよう少しずつ民間の方を前に出していければというのが、ぼくの中にはあります。そううまくいかわかりませんが、そんなイメージで考えています。

町永◆もともとは知事の発想で、そういう意味ではトップダウンはいいことですが、町づくりキャンペーンの今までの発表は、ご本人の声に近いところから、それを実感している方々の下からの積み重ねでできてきたと思います。本田さんご自身として、上から、行政の長からすすめていく施策と、下からの声をどうやって官民一体としてやっていくのか、そのあたりの難しさ、可能性をどう考えておられますか。

本田◆やはり、出すぎるとあまりよくないと思います。知事には節目で先陣をきっていただいて、方向を示していただき、現場の事業には基本的に行政はあまり口出しをせずに、よっぽどおかしいことでない限り、民間の方が考えたこと、アイデアをいただくのがよいのではないかと思います。

町永◆これまでの発表もそうですが地域では、現場の声から積み重ねてきたことを行政に後押ししてほしい、関わってほしいという要望がありますが、今度の取り組みの中でどのように現場の声を取り込まれているのでしょうか。

本田◆たとえばイベントの時に、さあ、なにをされますかとこちらから投げかけると、じゃあこれをやろうという形で進むことが多いです。ちゃんと行政がみえていますよというシグナルを民間の方へ送ることが非常に大事なことです。また、今日は自分たちが表彰をうけている側ですが、表彰というのもよくある手段であり、自分たちも県のキャンペーンで民間の方を表彰しましたが、そういうふうで紹介していただくことはとても励みになると思います。自分たちの活動がちゃんと世の中に認められているんだという満足感をもっていただくことができると思います。

町永◆認知症の取り組みについて、NPO などからバックアップしてほしい、後援がほしい、という声があればすぐに対応されるということですか。

本田◆基本的には後援は断らないというスタンスです。会場も基本的に県の会議室があれば、県の大きな会場なども含めて原則無料でお貸ししております。

町永◆熊本県には認知症疾患センターが8箇所もあるということですがこれをどう機能させるか、また、地域包括支援センターも地域によっては人手不足で機能していないといわれていますがこれをいかに実体化させていくか、地域医療やサポート医などについてもなかなか機能していないところがあり、国との関係ともありますが、国のほうをどう押し上げていくか、こうしたことについていかがですか。

本田◆今年度、来年度など、できるだけデータなどを国にお出ししたいと思います。

町永◆今日は厚労省の方もきておられますからね。県のトップがやるということは、そのことも含めて、国の恩恵や成果をすみやかに下におろしてもらえんと思いますし、熊本県が県として 2009 モデルになったということはみなさんとともに心強いことだと思ひ、細かく伺いました。ありがとうございました。



●「町づくり2009モデル」推薦理由●

- ・住民のボトムアップ活動とともに、県がしっかりと活動を理解し支えることで、認知症の人への啓発や施策も加速がつくことを示してくれている取り組みである。知事が全国初の認知症サポーターとなる等、特に、トップリーダーの積極的な姿勢と取り組みは強力な推進力となる。それらの推進力を応援する意味で選定した取り組みであり、全国的に広がっていくことが望まれる。
- ・「認知症になってもできるだけ住み慣れた地域で安心して暮らせるくまもとづくり」を目指して、県知事、県行政がイニシアチブをとり、市町村や関係団体と連携しながら、住民への認知症の理解を積極的に促している活動は今後の全国の各都道府県のモデルとして意義深い。
- ・「県民一丸となって」の街頭啓発活動は、非常にインパクトがあり、今後多くの自治体に広がっていくことを期待したい。

[発表資料]

熊本県の概要

(H21.10.1現在)
人口:約182万人

高齢化率:25.5%
(全国より7年早く高齢化が進む)

○高齢化率30%超の市町村:24市町村
(県内市町村数:47市町村)

○認知症高齢者の大幅な増加

→来年度から5年間で約20%の増加

熊本県

平成23年3月 九州新幹線全線開業
同年10月 ねりんピック 熊本大会開催
平成24年 熊本市が政令指定都市へ

認知症対策の推進に向けて

○一昨年4月の蒲島知事就任後、「長寿を恐れない、長寿を楽しめる社会」を目指し、認知症対策を県の重点施策に位置づけ。→「認知症対策・地域ケア推進室」の設置

○「認知症になっても住み慣れた地域で安心して暮らせる熊本づくり」を目指し、市町村はもとより、当事者団体や医療、保健、介護、福祉等の関係団体と連携し、様々な取り組みを進めている。

認知症対策の3つの柱について

本県における認知症対策については、以下の3つの柱を立て、総合的に推進する。

医療体制
早期診断・診療体制の整備
・認知症サポーター養成研修
・かかりつけ医師の認知症対応力向上研修

介護体制
適切なケアマネジメントの質の確保
・認知症介護研修の拡充

地域支援体制
認知症に関する地域支援体制の構築
・認知症サポーター養成講座
・認知症地域支援体制モデル事業
・地域の誰もが取り組みやすい地域づくり
・認知症対応型モデル事業
・認知症対応型モデル事業
・地域ケア会議の活用普及モデル事業

「コールセンター」の設置

連携強化

総合的な認知症対策の概要について

医療体制の充実
★「熊本モデル」認知症疾患医療センター
・地域拠点型センター
○ほたる心療病院(熊本市)
○ほたる心療病院(宇土市)
○山鹿田生現病院(山鹿市)
○阿蘇やまなみ病院(阿蘇市)
○益城病院(益城町)
○宮原病院(八代市)
○天草病院(天草市)

医療・介護の連携強化
★認知症対応型地域包括支援センター
・地域包括支援センター
○認知症連携担当を新たに配置
○地域拠点型認知症疾患医療センターに対応

認知症に関する電話相談窓口「認知症はつとコール」の設置
○認知症の人や家族の悩み等の総合相談窓口を設置(7月1日設置)

認知症サポーターの養成(H23年度までの目標数約5万人)
○中後、毎年1万人養成、12月末現在、サポーター数149,563人。現在、全国2位。

認知症地域支援体制構築等推進事業の実施(7市町村で実施)
○玉名市、菊池市、谷本町、西原村、八代市、水俣市、御代町。県下各地への浸透を期待。

県内の認知症地域支援体制の構築

H19.20 → H21.22
2市町→7市町村(モデル事業)

県内各地で認知症の人と家族を地域で支える体制の構築

＜認知症サポーターの養成状況＞

年度	人数
H19	7,387
H20	29,283
H21.12	48,563

大幅な増加

今年度の認知症対策の取組状況

I 認知症疾患医療センター指定数 **8ヶ所(全国1位)**
※都道府県として

II 認知症地域支援体制構築等推進事業 実施市町村数 **7市町村(全国2位)**

III 認知症サポーター養成者の人口に占める割合 **(全国2位)**

これらの取組みを更に県民に広める

認知症啓発キャンペーン2009inくまもと

平成21年10月3日開催
○認知症よろず相談会
○シンポジウム
○植口アミニコンサート
○展示コーナー 等

知事、熊本市長をはじめ関係者等約250名で、繁華街のアーケード(新市街、下通)を往復し、認知症への理解を求める呼びかけ等を実施。

認知症啓発キャンペーン2009INくまもと実行委員会

・(社)認知症の人と家族の会熊本県支部、熊本県、熊本市、(社)熊本県医師会、(社)熊本県医師会、熊本県療養病床施設連絡協議会、(社)熊本県精神科病院、(社)熊本県看護協会、熊本県弁護士会、熊本県司法書士会、(財)熊本県社会福祉協議会、(財)熊本県社会福祉協議会、熊本県地域包括在宅介護支援センター協議会、熊本県地域包括支援センター連絡協議会、熊本県老人福祉施設協議会、(社)熊本県老人保健施設協会、熊本県宅老所グループホーム連絡会、熊本県民生委員児童委員協議会、(社)熊本県老人クラブ連合会、熊本県老人クラブ連合会、(社)熊本県社会福祉士会、熊本県介護福祉士会、熊本県高齢者の抑制を考える会(隔年開催)

○「認知症になっても住み慣れた地域で安心して暮らせる熊本づくり」を目指し、行政、関係団体、県民が一体となった認知症の総合対策を進めてまいります。

○御清聴ありがとうございました。

7 「認知症を受け入れるということ

～若年性認知症を抱える夫妻と支援者との出会い～

富士宮市サポートチーム／佐野 光孝・明美（静岡県富士宮市）

発表者： 富士宮市福祉総合相談課 主事 村瀬 裕美子



佐野さんご夫妻が市役所に相談にみえたことをきっかけに、地域の商店街の方などの理解によって、観光案内所で観光ボランティアとして貢献いただいていることは、関わるスタッフや認知症のご本人、ご家族にとって勇気となり、認知症にやさしい町づくりをめざす市の財産になっています。家族の会に入り、認知症という病気を受け入れながら講演活動も始め、病気の告知へのさまざまな反応もそのまま受け入れながら、どんどん挑戦していきたい、今困っている人達へ、これから困るかもしれない人たちへ、自分たちの思いを自分たちの言葉で伝えていききたい、と活動されています。

インタビューから

＜保健師の藤田さんとともに登壇＞

町永 ◆ 今までの発表とはちょっと違い、こうした若い二人の行政担当者を含むさまざまな人が、しっかりと温かく、若年性認知症のご夫妻を見守っているという、そんな発表だったと思います。このスタンスを私たちは共有しなければいけないと思います。佐野さんご夫妻と関わるようになったのは、どういう経緯だったのでしょうか。

村瀬 ◆ ご夫妻は認知症と診断されて半年くらいは閉じこもった生活をされていましたが、ケアマネをやっている知り合いの方に、市の福祉総合相談窓口にご相談にいらしたらどうかといわれ、窓口にいっしょにきました。地域包括支援センターの相談員でもある保健師が窓口でいろいろな思いを伺い、ご夫妻の趣味とか特技、今まで営業マンとして活躍されてきたということを書いて、観光案内所のボランティアはどうかと考え、その日のうちに紹介をさせてもらいました。そこから関わりをもたせていただいています。

町永 ◆ 村瀬さんは、その時はその場にいたわけではなかったのですか。

村瀬 ◆ その場にはいませんでした。私は事務職員なのですが、保健師さんなどの専門職員と事務職員が連携をとりあって一緒にサポートをさせてもらっています。

町永 ◆ 最初にそういった話を伺った時、どう思いましたか。若年性認知症の方で、まだご自身も認知症の病気についてあまり理解していない方がいらっやして、さあどうしようという状況になって。

村瀬 ◆ 私のまわりに認知症の方はいらっやらなかつたですし、特に専門職でもなく病気のこともよくわかりませんでした。ご夫妻の言葉をまず伺い、ご夫妻が自分の親と同年代ということもあり人ごとではないなと思いました。

町永 ◆ それがよくつたんですね。なんだかわからないということで、認知症の人というのではなく、佐野さんという人から入っていかれたのだと思います。保健師の藤田さん、佐野さんと初めて接した時に、どういった関わり、取り組みをしようと思いましたか。

藤田 ◆ すぐに取り組みがうかんだわけではなく、佐野さんがしゃべってくださったメッセージ、たとえばさきほど画面にも出てましたが、“自分は男性として仕事をして家庭を守ってきたが、今は、、、”とこの言葉からも、暮らし、仕事、家の中と外での役割、経済などさまざまなものを連想させます。また、佐野さんは普通に対応してほしいとおっしゃいました。普通というのはどんなことなのか、とそういったメッセージ、言葉を一つずつ受けとったというのが、取り組みとまでいえないかもしれませんが、そこから始まりました。

町永 ◆ 印象的ですね。行政側からこうましよう、ではなく、むこうからいわれて、どうすればいいのかということを知ったんですね。観光ボランティアを始めて、佐野さんの日常にはどういった変化がありましたか。

村瀬 ◆ それまでは表情がとても暗かつたのが、ボランティアとして社会に出て地域貢献をしていただいて、観光案内所もとてもアットホームないい雰囲気みたいで、だんだん笑顔を取り戻していかれました。

町永 ◆ 佐野さんご夫妻のサポートをしておられますが、若年認知症の方が富士宮市にもまだまだいらっやいますよね。その中であえて一組のご夫婦ですよね。その意味合いをどうお考えですか。

藤田 ◆ 佐野さんご夫妻の言葉、メッセージからまず充分感じていくことが大事だと思っています。佐野さんの言葉



をキャラバン・メイトや介護職だけでなく、サポーター養成講座でこの DVD を使ってお伝えしています。とても印象的なのが、小さいお子さんを育てている若いお母さんが佐野さんの暮らしぶりの中から、子育ても孤独だけれど抱え込んではいけないんだということを学び、また、小さい子供を抱えていると自分たちは地域で支えられているだけだと思っていたが、その自分たちも誰かを支えることができるんだ、と学んだとおっしゃってくださいます。一人の言葉ですがとても重要なメッセージを含んでいると思います。

町永◆あえて拡散させないで、お一人にとことん向き合うということですね。村瀬さんはどうお考えですか。

村瀬◆私は認知症の知識がゼロという中から、佐野さんが持っておられた思いをそのまま伝えていただいただけで、今後の自分のためになったというか、だからこそ、これからご夫妻がどんなことを思っているのか、できる限りくみとって接していきたい、一緒に歩んでいきたいと思っています。

町永◆失礼な言い方もかもしれませんが、村瀬さんも大きく育ったというわけですね。一組のご夫妻と向き合って、若年性の方も含めて認知症の方々への、行政者としての大きな力になったということなのだろうと思います。

●「町づくり2009モデル」推薦理由●

- ・ 地域に点在する若年認知症の人の支援において、拠点を作らなくても支援が可能であるということを示してくれた活動として大変意義深い。
- ・ 若年認知症の人と家族を支援する具体的な方法を担当者と支える住民・関係機関が学びあい、理解の輪が広がっている。富士宮市として若年認知症の人の暮らしを支援するにあたって抱える課題は、他の自治体でも同様と考えられ、こういった課題や活動が共有されることが望まれる。
- ・ 当事者の声に自治体として専門職が丁寧に耳を傾け、本人・家族の心の変化と受容、前向きな姿勢への心理的変化等のプロセスの共有から得た学びは、これからの若年性認知症の人を支えるための大切なヒントを多く示してくれている取り組みである。

[発表資料]

認知症を受け入れるということ
～若年性認知症をかかえる夫妻と支援者との出会い～

静岡県富士宮市サポートチーム

夫妻との出会い

平成20年 2月	富士宮市の相談窓口を訪れる
	観光案内所でボランティアを始める
12月	テレビ局取材
平成21年 4月	静岡新聞取材
5月	初めての講演活動
	DVD配布
全国からの依頼に応じて	◆DVDを使った講座が各地で展開される ◆全国での講演活動 講演先(予定を含む) [福島県・宇都宮市・三重県御浜町・東京都・上尾市・静岡県内(浜松市・西伊豆町・湖西市など)ほか]

夫妻の思い

◆夫がやらせてもらえる仕事や、安心して出かけられる場所がほしい。
◆高齢者のためのサービスではなく、夫が楽しみを感じながら過ごせる場所がほしい。
◆家の中に閉じこもってはいけません。

必要な支援
閉じこもった生活からの脱出(人との関わりを持つ)

性格・生活スタイル・特技・趣味
何よりも夫が楽しみ生きがい社会との関わりが持てるような場所があれば...

地域貢献
富士宮焼きそば
観光案内ボランティア
徐々に夫妻は自分たちの生活リズムを築いていく...

その後...
家族会への参加
テレビ局・新聞社の取材
病気を正しく理解し受け入れていくようになる

夫の思い

一家の主として、1人の男として...
働いて収入を得、自分が家族を支えたいというプライド
収入を得る方法はないだろうか...
営業マンだった経験・性格・2人の生活リズム・特技・趣味

認知症と診断されてから病気として理解し受容するまでの過程

講演活動を提案
認知症の方やその家族、それを支えるすべての人にとって参考になる。

誰かのためになるのなら...
事業所職員向け講演

講演後は
暗れ暗れとした表情に...
人前で話すという日々の緊張感講演をやり返した充実感

どんどん挑戦してみたい!!

DVD作製&全国への配布

◆全国の市区町村
◆包括支援センター
◆社会福祉協議会
◆家族会
◆様々な研修会や講演会で「認知症本人と家族の思い」を伝えるために使用されている。

全国からの依頼に応じて...

まだ認知症を十分理解していない人たちへ
認知症に悩む人たちへ
自分たちの言葉で自分たちの思いを伝えていきたい...

認知症を受け入れるということ

ある日突然...
バカバカしい営業マンだった夫の介護で夫が認知症と診断された

自分だけが悩んでいない...
自分だけが悩んでいない...
病気で認知症と診断された上により病状が悪化して受け入れられるようになった

妻は戸惑い、悲しみ、絶望した...
しかし、自ら認知症を理解し、夫のあるがままを受け入れた

妻の毎日の介護生活...
認知症の人自身も持っている生活リズム...
認知症の方やその家族、それを支えるすべての人にとって参考になる。

平成21年5月20日「認知症を受け入れるということ」講演DVD 抜粋

夫妻と出会って...

夫妻
人・社会と関わるようになった。言葉を話し始め、達成感・充実感を得られる。収入に繋がっている。社会貢献・地域貢献しているという自信。

理解の輪

富士宮市
認知症になっても住み慣れた地域で誰もが自分らしく笑顔で暮らせる社会を目指し...

地域住民
認知症の方やその家族・知人にとって、夫妻が認知症と向き合う姿は希望となる。生の声から認知症を学ぶ。やさしいまごころのきっかけとなっている。

現在
私生活支援・生きがい対策・本人や家族への正しい知識の普及
医療機関との連携
観光資源へのサポーター養成講座の積極的な展開など、まちぐるみでやさしいまちづくりを

働き盛りの方なら誰もが当たり前と思うこと

安心して出かけた
楽しく暮らしたい
働きたい

そんな思いを 知ることから始まる

夫妻

自分たちの活動によって
少しでも認知症への差別や偏見がなくなり
より多くの人の理解が得られますように...

そしていつか...
認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく笑顔で暮らせる社会が実現するように...

夫妻の思いが
より多くの人の心に届きますように...

Ⅲ. 本日のまとめ

**認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議議長
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009地域活動推薦委員長
堀田 力**

皆様には大変長い時間お聴きいただきました。心から感謝いたしております。

昨年、私は「認知症の方を幸せにできないような町はほかの人も幸せにできない」ということを申し上げました。今日の第1部、第2部を通じて、私たちはそれができるんだということが示されたと思います。

本日の会をききながら、キーワードは2つあると思います。1つは「愛情」。これは本当に、どの事例からもほのぼのとした、本人への愛情、お互いへの愛情、これが伝わってまいります。

もう1つは、「つながり」です。「きずな」という言葉や「ネットワーク」という言葉もありましたが、やはり人と人がつながって、幸せをつくりだしていくのだということがしっかりと示されており、大変心強く、頼もしく思っております。

第2部の発表では、特にその「愛情」と「つながり」が示されていきました。たとえば高松市の認知症の方が主になった朝市・地域食堂の松木さんのご報告、あるいは東海市の買物支援においてご本人の能力を生かそうという尾之内さんのご報告、杉並での介護者のつながりに関する北原さんのすばらしいご報告、そして小金井市・また明日の森田さんご夫妻の試み、本当に温かいつながりからすばらしい成果が生まれたというメッセージがしっかりと伝わったと思います。

今回の7つの事例は、これまでと若干違いまして、最初に報告されました小樽市の市民後見人活動は、市民後見人活動をしっかりと広げたいというメッセージであります。市民後見人活動に小樽市以上に取組んでいる団体は全国にもございます。けれども、この小樽市の事例は市民後見人の活動だけではなくて、お互いにまちをつくりたい、がんばろう、とつながっている中から、自分たちの町に市民後見人が必要だと自然に広がってきた活動であり、それを市民の手でやっておられるというところがすばらしいと思います。どんな町でも団体でも、そうした思いをもつことができれば取り組めるというメッセージであろうと思います。

それからあと2つ、熊本県と富士宮市は行政からのご報告ですが、これは例年とはちょっと赴きを異にします。富士宮市の若年性認知症の御夫妻と共同応募である村瀬さんのご報告はとてすばらしい市としての取り組みであり、モデルであります。こんなにきめこまかく、こんなにやさしくご本人の能力を活かしてもらえる、すばらしいモデルであります。各市区町村、心があればできるという、いいモデル例だと思います。それに比べまして熊本県は、端的に申しまして、すばらしいモデル例かと申しますと、県として非常にすぐれたすばらしい取り組みをされているのは間違いないのですが、モデルとして出すほどのものかといわれると、よくがんばっておられるというだけの活動です。これをここで申し上げるのは大変失礼なのですが、なぜ選んだ



かと申しますと、私たちは民間で取り組みをしており、市民の方々の応募からモデルを示している中に、県として応募して下さった、この根性（笑）、心意気でありまして、これを私どもは大変高く評価しました。県のほうが私たちと一緒にやろう、私たちのレベルにあわせてやろう、としてくれているその心意気をもってくださるならば、我々も快く手をさしのべ、行政も一緒に組んでやりましょう、と私たちの心意気を示す為に県を選ばせていただいた、こういうことであろうと私は思います。

いずれにしても行政であれ、民間であれ、もちろん認知症のご本人であれ、いろいろな立場から、できることを思い切りやり、そしてつながって、力を合わせてすすめていきたいと思えます。昨年よりもさらに充実いたしました。来年ももっともっと充実することを願ひまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。今日は本当に長い間、ありがとうございました。

IV. 平成21年度の各活動

1. 「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの事業（概要）

●「認知症サポーター100万人キャラバン」～「認知症サポーター養成講座」の展開

本事業ではキャラバン・メイト養成研修を開催し、養成されたメイトが住民向けや職域・学校等で精力的にサポーター養成講座を開催しています。平成17年に開始して以来、丸4年間を待たずに認知症サポーターが100万人に到達し（平成21年5月31日）、同7月に「認知症サポーター100万人達成記念大会」を開催しました。あらたな目標に向かい、さらにサポーターの輪を広げています。

☆認知症サポーター総数－ 1,469,595人 （内、キャラバン・メイト総数－ 43,329人）
<平成21年12月31日現在>

●「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009

本キャンペーンは今年度で6回をむかえ、全国から55の地域活動が寄せられました。ホームページではこれまで応募いただいた活動を検索のほか、モデルとなった活動の「その後レポート」がご覧いただけます。平成19年度より始まった「認知症地域支援体制構築等推進事業」の全国の担当部署へ引き続き資料を提供しました。 ※詳細は、「第2部資料」をご参照ください。

●認知症の人「本人ネットワーク」支援

本人ネットワーク支援委員会では、全国各地の家族会やケア関係者の協力を得て、「本人ネットワーク」支援事業をすすめています。21年度は、認知症の人自身からの情報発信、認知症の人同士のピアサポートを支援する取り組みを広げ、持続可能な条件を整えることを目的としました。また、認知症の人たちの社会的な力の回復（エンパワメント）、認知症に対する生活支援の向上につなげることも目的とし事業を行いました。このため、より身近な地域での交流会の実施ができるようになることや、本人たちが情報発信し支えあえるような内容をすすめていきました。

具体的には、①全国7カ所近隣の認知症の人たちが集まる日帰りの交流会、②関西と関東で1回ずつ「支援者養成研修」と「本人支援の実践報告」、③春と秋の認知症の人による本人交流会、④認知症の人がインターネットや紙媒体で情報発信をしていくなどを行いました。

●認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進（暫定版。修正まち）

認知症の本人と家族が、当事者ならではの情報や思い、力を「センター方式」を使って関係者に上手く伝え、関係者との対話とつながりを深めながらよりよい支援を一緒に生み出し、安心して暮らせる町を共に築いていくことを推進しています。21年度は、①家族がセンター方式を気軽に使っていくためのサポートを各地の家族会等と協力しながら行いました。②実際に活用した家族が本人と家族の情報・声を支援に活かすことの大切さと効果を専門職員の研修で報告しました。③地元の家族、ケア職員、支援関係者等がセンター方式を一緒に学びながらよりよい支援を具体的に進めていく研修会や検討会を自治体等が開催する支援を行いました（全国80地域）。これらを通じて、相互の理解や連携が深まり支援の輪が広がった、そのことによって本人と家族の心身状態が落ち着く、地域で暮らしやすくなった、などの成果がうまれました。

2. 「『認知症サポーター100万人キャラバン』～認知症サポーター養成講座」実施状況

1. 認知症サポーターの人数

認知症サポーター数（キャラバン・メイト43,329人を含む） 合計 1,469,595人

※カウント数外：計画書の提出があり報告書が未提出のサポーター数=145,939人

※平成21年12月31日現在（平成21年12月31日までに提出された実施報告書に基づく）

《内訳》

◎認知症サポーター数 1,426,266人 （講座開催回数 38,458回）

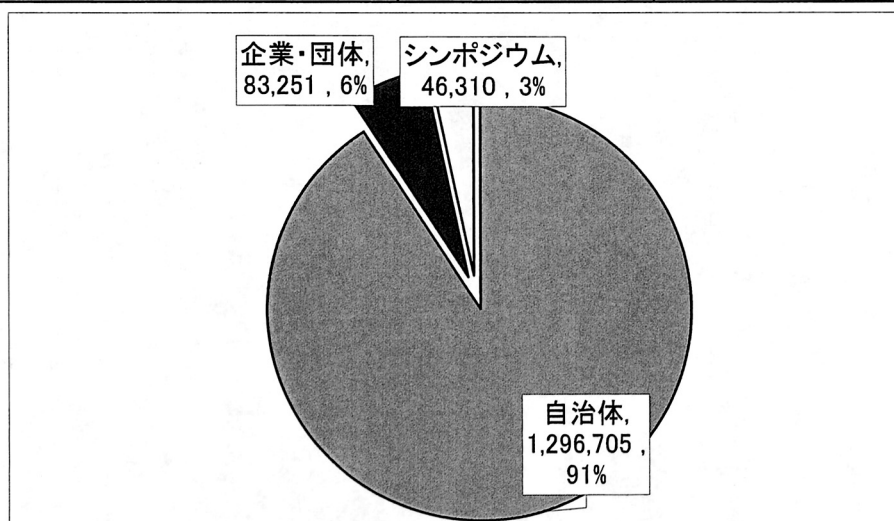
◎キャラバン・メイト数 43,329人

① 年度別のサポーター数・講座開催回数 の内訳

年度別	サポーター数	講座開催回数
17年度	29,982	323
18年度	138,436	2,858
19年度	279,787	6,974
20年度	479,860	13,629
21年度（～12月末）	498,201	14,674
合計	1,426,266	38,458

② 実施主体別のサポーター数・講座開催回数 の内訳

実施主体別	サポーター数	講座開催回数
自治体・地域において養成されたサポーター（自治体型）	1,296,705	35,946
全国規模の企業・団体により養成されたサポーター（企業・団体型）	83,251	2,313
広域からの参加者によるシンポジウム・フォーラムによるサポーター（啓発型）	46,310	199
合計	1,426,266	38,458

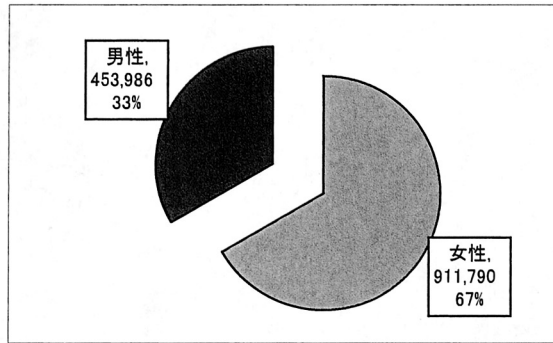


2. サポーターの性別・年代別構成

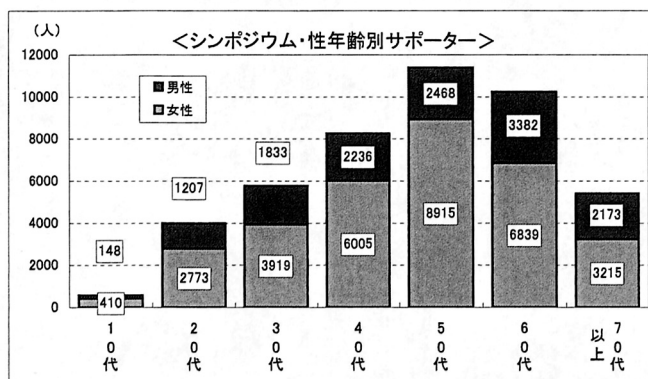
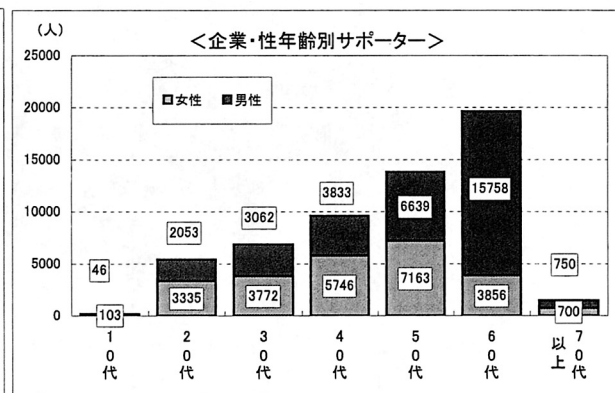
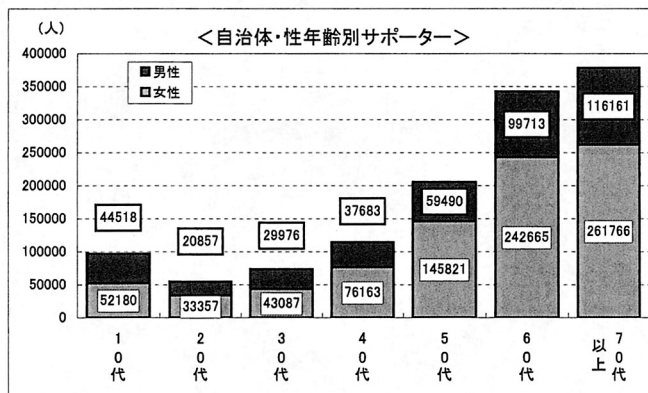
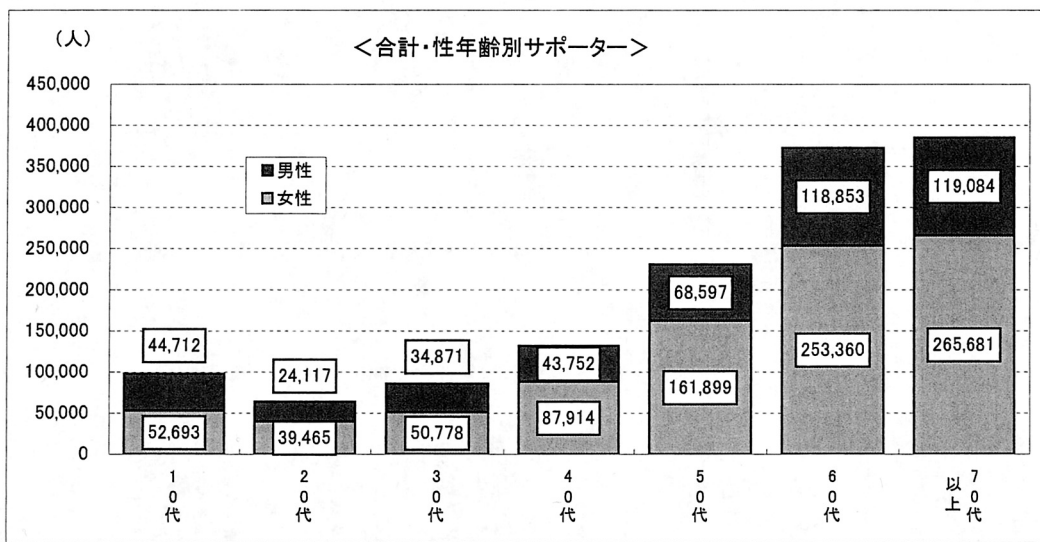
性別・年代別構成（年代、性別の回答があったもののみ）

サポーターの男女別割合

	合計		
	女性	男性	合計
10代	52,693	44,712	97,405
20代	39,465	24,117	63,582
30代	50,778	34,871	85,649
40代	87,914	43,752	131,666
50代	161,899	68,597	230,496
60代	253,360	118,853	372,213
70代以上	265,681	119,084	384,765
合計	911,790	453,986	1,365,776



※年代別の回答がなかったものは除く。



3. 自治体・地域でのサポーター養成

	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度 (~12月末)	合計
サポーター数	12,042	114,579	257,737	449,713	462,634	1,296,705

「認知症サポーター養成講座」実施自治体数

1422 自治体

1. 事務局設置自治体数

1333 自治体

2. 事務局未設置で講座が開催されている自治体数

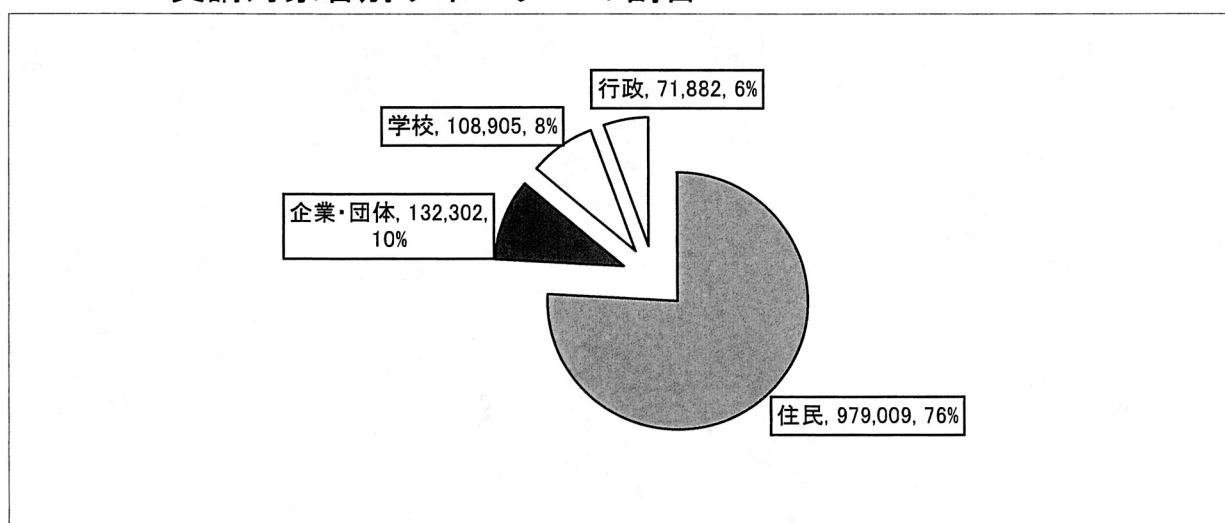
89 自治体

(独立型メイトによる講座が開催されている市町村・都道府県数、
都道府県が実施主体となって講座が開催されている市町村数)

受講対象者分類別サポーター数

対象者分類	サポーター数	講座開催数
1 住民	979,009	28,748
2 企業・団体	132,302	3,510
3 学校	108,905	1,794
4 行政	71,882	1,764

受講対象者別サポーターの割合



④-1 都道府県別キャラバン・メイト数、認知症サポーター数

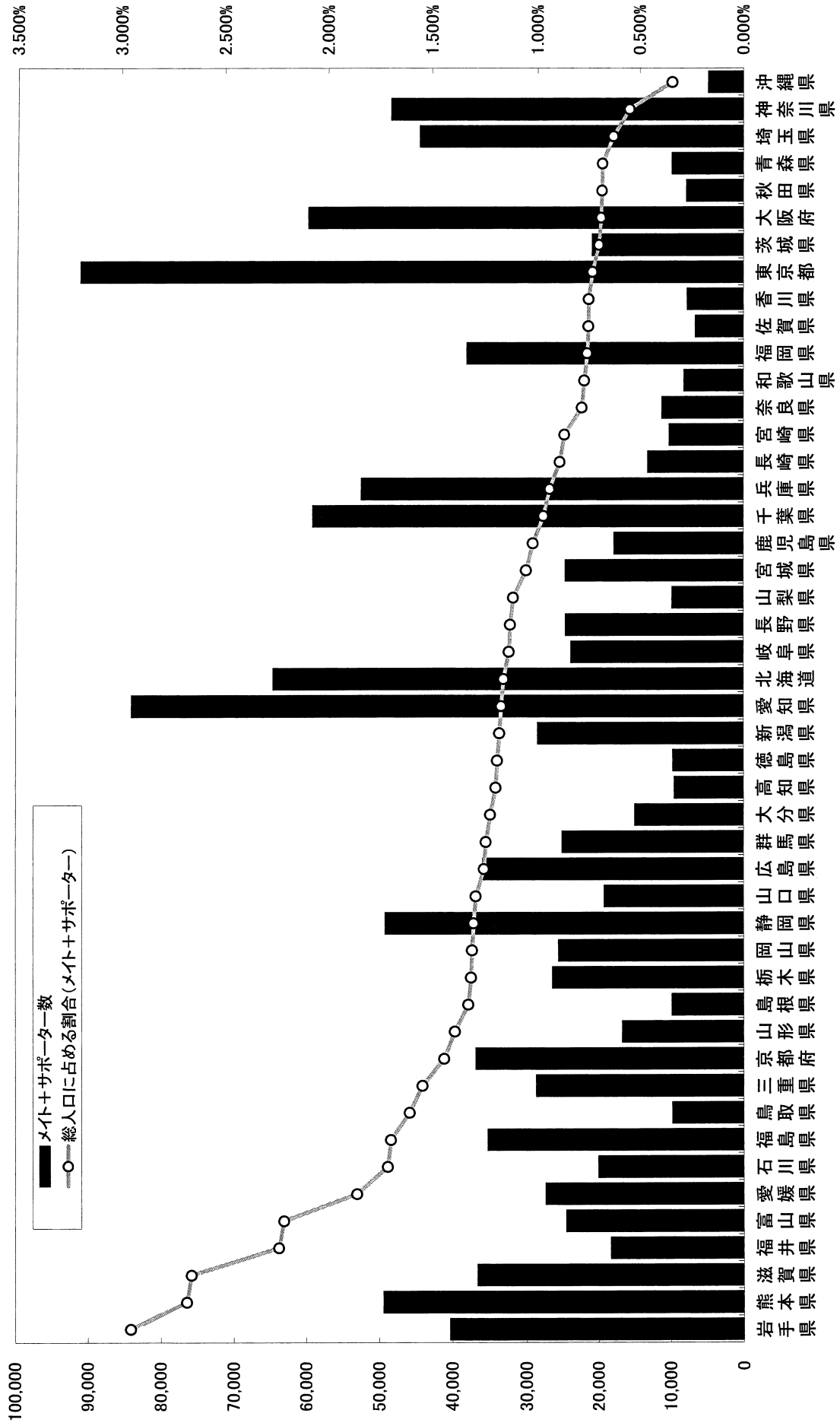
平成21年12月31日現在

	総人口	65歳以上人口	高齢化率	サポーター 講座開催回 数	メイト数 (※1)	活動メイト 数	非活動メイト 数	サポーター数 (※2)	メイト+ サポーター数 (※1+※2)	総人口に占 める割合 (メイト+ サポーター)	メイト+サ ポーター1 人当たり担 当高齢者人 口	総人口 10000人当 たりの講座 開催回数
全国	127,066,178	27,411,466	21.6%	35,946	40,512	35,488	5,024	1,296,705	1,337,217	1.052%	20	2.829
北海道	5,571,770	1,279,457	23.0%	1,874	3,209	2,356	853	61,312	64,521	1.158%	20	3.363
青森県	1,430,543	342,850	24.0%	211	296	276	20	9,464	9,760	0.682%	35	1.475
岩手県	1,366,652	352,341	25.8%	979	673	512	161	39,564	40,237	2.944%	9	7.163
宮城県	2,334,874	495,463	21.2%	606	669	528	141	23,892	24,561	1.052%	20	2.595
秋田県	1,130,823	317,054	28.0%	261	546	540	6	7,191	7,737	0.684%	41	2.308
山形県	1,194,071	316,371	26.5%	432	516	323	193	16,057	16,573	1.388%	19	3.618
福島県	2,075,555	489,889	23.6%	1,041	667	605	62	34,478	35,145	1.693%	14	5.016
茨城県	2,982,000	622,278	20.9%	384	514	370	144	20,370	20,884	0.700%	30	1.288
栃木県	2,006,701	415,782	20.7%	657	742	705	37	25,595	26,337	1.312%	16	3.274
群馬県	2,012,151	445,145	22.1%	422	451	375	76	24,542	24,993	1.242%	18	2.097
埼玉県	7,067,336	1,303,883	18.4%	1,136	895	850	45	43,551	44,446	0.629%	29	1.607
千葉県	6,090,799	1,178,043	19.3%	1,444	1,670	1,539	131	57,416	59,086	0.970%	20	2.371
東京都	12,462,196	2,435,567	19.5%	2,777	2,246	2,010	236	88,931	91,177	0.732%	27	2.228
神奈川県	8,798,289	1,644,737	18.7%	1,197	1,887	1,659	228	46,533	48,420	0.550%	34	1.360
新潟県	2,413,103	603,568	25.0%	847	1,342	1,272	70	27,077	28,419	1.178%	21	3.510
富山県	1,106,340	272,379	24.6%	727	628	562	66	23,792	24,420	2.207%	11	6.571
石川県	1,167,151	261,152	22.4%	562	596	547	49	19,340	19,936	1.708%	13	4.815
福井県	815,344	192,847	23.7%	364	462	361	101	17,730	18,192	2.231%	11	4.464
山梨県	871,481	203,921	23.4%	292	405	273	132	9,289	9,694	1.112%	21	3.351
長野県	2,176,806	546,789	25.1%	907	1,283	1,163	120	23,249	24,532	1.127%	22	4.167
岐阜県	2,095,484	473,233	22.6%	662	922	820	102	22,824	23,746	1.133%	20	3.159
静岡県	3,775,400	839,982	22.2%	1,199	1,044	928	116	48,041	49,085	1.300%	17	3.176
愛知県	7,185,744	1,366,398	19.0%	2,247	1,515	1,299	216	82,459	83,974	1.169%	16	3.127
三重県	1,856,282	425,896	22.9%	776	979	912	67	27,647	28,626	1.542%	15	4.180
滋賀県	1,377,886	269,233	19.5%	938	800	713	87	35,740	36,540	2.652%	7	6.808
京都府	2,558,542	565,629	22.1%	1,110	2,105	1,883	222	34,693	36,798	1.438%	15	4.338
大阪府	8,670,302	1,773,824	20.5%	1,614	1,574	1,412	162	58,217	59,791	0.690%	30	1.862
兵庫県	5,582,230	1,187,654	21.3%	1,493	1,317	1,270	47	51,112	52,429	0.939%	23	2.675
奈良県	1,419,626	310,776	21.9%	220	381	348	33	10,717	11,098	0.782%	28	1.550
和歌山県	1,045,973	264,111	25.3%	269	478	405	73	7,579	8,057	0.770%	33	2.572
鳥取県	602,411	150,052	24.9%	280	439	317	122	9,219	9,658	1.603%	16	4.648
島根県	733,123	205,700	28.1%	252	347	254	93	9,364	9,711	1.325%	21	3.437
岡山県	1,948,250	461,322	23.7%	840	558	558	0	24,923	25,481	1.308%	18	4.312
広島県	2,864,167	639,903	22.3%	988	866	808	58	34,957	35,823	1.251%	18	3.450
山口県	1,479,840	391,440	26.5%	566	696	614	82	18,385	19,081	1.289%	21	3.825
徳島県	805,951	204,228	25.3%	313	385	263	122	9,191	9,576	1.188%	21	3.884

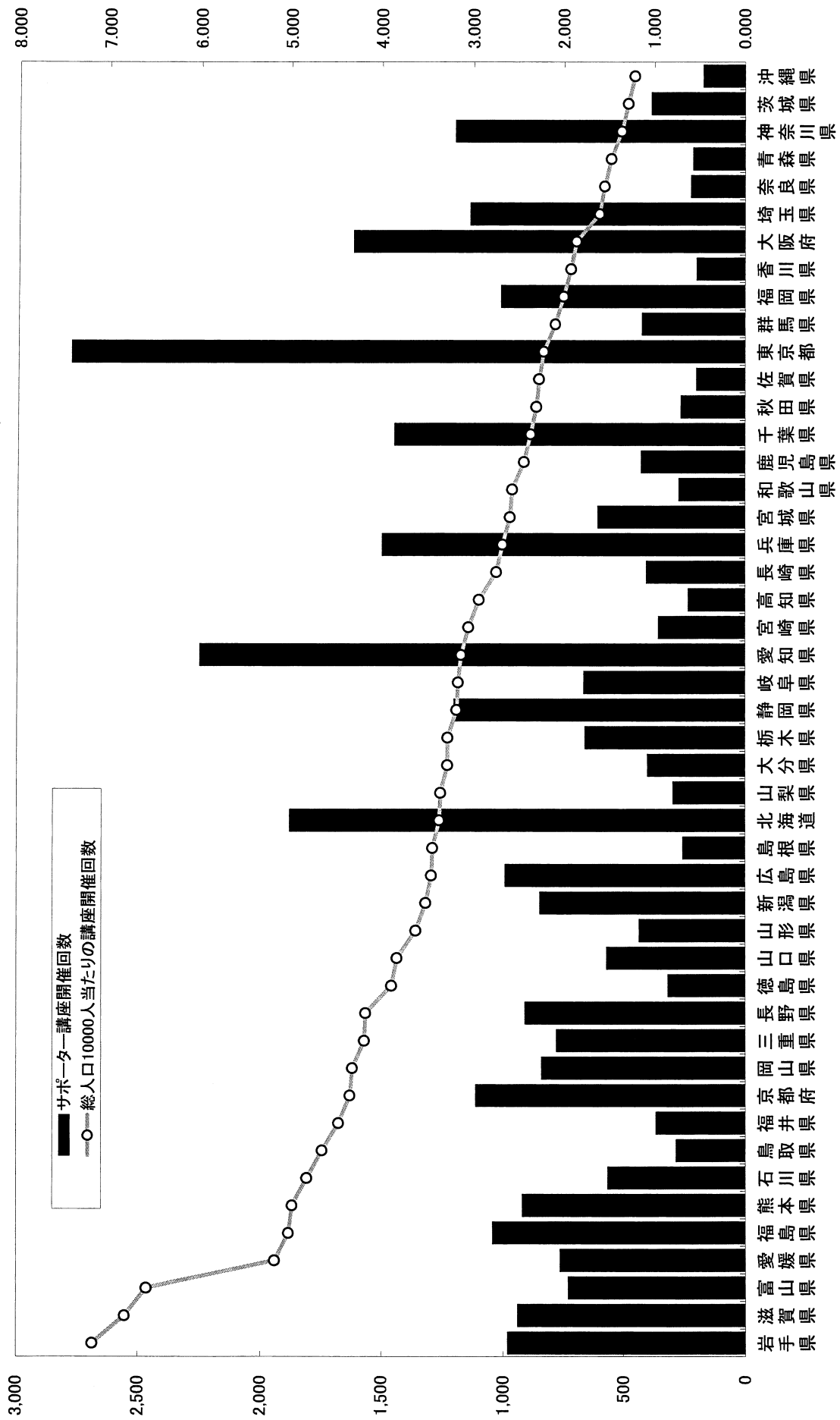
	総人口	65歳以上人口	高齢化率	サポーター 講座開催回 数	メイト数 (※1)	メイト数		サポーター数 (※2)	メイト+ サポーター数 (※1+※2)	総人口に占 める割合 (メイト+ サポーター)	メイト+サ ポーター1 人当たり担 当高齢者人 口	総人口 10000人当 たりの講座 開催回数
						活動メイト 数	非活動メイト 数					
香川県	1,019,333	246,378	24.2%	196	175	137	38	7,461	7,636	0.749%	32	1.923
愛媛県	1,471,510	368,229	25.0%	761	792	643	149	26,518	27,310	1.856%	13	5.172
高知県	784,038	212,088	27.1%	230	667	608	59	8,700	9,367	1.195%	23	2.934
福岡県	5,030,818	1,050,467	20.9%	1,008	1,213	1,136	77	36,842	38,055	0.756%	28	2.004
佐賀県	864,738	202,370	23.4%	197	427	375	52	6,067	6,494	0.751%	31	2.278
長崎県	1,469,197	362,043	24.6%	403	433	433	0	12,645	13,078	0.890%	28	2.743
熊本県	1,844,644	452,408	24.5%	918	766	738	28	48,563	49,329	2.674%	9	4.977
大分県	1,215,388	306,661	25.2%	398	360	239	121	14,468	14,828	1.220%	21	3.275
宮崎県	1,161,026	284,119	24.5%	354	776	775	1	9,292	10,068	0.867%	28	3.049
鹿児島県	1,739,075	446,385	25.7%	425	580	580	0	17,157	17,737	1.020%	25	2.444
沖縄県	1,391,215	231,421	16.6%	169	220	195	25	4,551	4,771	0.343%	49	1.215

※平成21年12月31日までに提出された実施報告書による
 ※窓口：連絡先として設置されている自治体等を含む
 ※登録から2年未満のキャラバン・メイトは、活動メイトとしている
 ※登録から2年間にわたり講座開催実績のないキャラバン・メイトは、非活動メイトとしている
 ※人口、高齢者人口：総務省発表 住民基本台帳による（平成20年3月31日現在）

＜④-2 都道府県別 認知症サポーター数(キャラバンメイトを含む)＞



＜④-3 都道府県別 認知症サポーター養成講座開催回数＞



5. キャラバン・メイトの人数

平成21年12月31日現在

キャラバン・メイト総数 43,329人 研修開催回数643回

(※2009年12月31日までに提出があり、報告シートに不備がなかったもので集計。)

①自治体によるキャラバン・メイト養成研修

修了者数	40,516 人
実施自治体数	289 自治体
都道府県	46 都道府県
区市町村等	243 区市町村等
開催回数	590 回

※複数自治体共同による研修は、各自治体を1と数える

②全国規模の企業・団体による研修実施状況

修了者数	2,813 人
実施企業・団体数	29 団体
開催回数	53 回

③自治体によるメイト研修修了者の受講要件内訳

* キャラバン・メイト登録名簿に基づく（複数回答）

受講要件	人数（割合）
1 認知症介護指導者養成研修修了者	912 (2.3%)
2 認知症介護実践リーダー（実務者・専門課程）研修修了者	3,454 (8.5%)
3 介護相談員	2,353 (5.8%)
4 認知症の人を対象とする家族の会	1,084 (2.7%)
5-1 行政職員（保健師、一般職等）	5,253 (13.0%)
5-2 地域包括支援センター職員	7,881 (19.5%)
5-3 介護従事者（ケアマネジャー、施設職員、在宅介護支援センター職員等）	11,154 (27.5%)
5-4 医療従事者（医師、看護師等）	1,264 (3.1%)
5-5 民生児童委員	1,878 (4.6%)
5-6 その他（ボランティア等）	5,158 (12.7%)

3. 『認知症でもだいじょうぶ』 町づくりキャンペーン2009』（概要）

◆目的

本キャンペーンは、認知症の人の本来の力を活かしてともに暮らすまちづくりの活動を全国ではぐくむことを目的としています。

◆主催等

- ・主催 社会福祉法人浴風会 認知症介護研究・研修東京センター
社会福祉法人仁至会 認知症介護研究・研修大府センター
社会福祉法人東北福社会 認知症介護研究・研修仙台センター
- ・共催 社団法人 認知症の人と家族の会
- ・協賛 住友生命保険相互会社

◆実行委員会

- | | | |
|-----|-------|---|
| 委員長 | 本間 昭 | [認知症介護研究・研修東京センター長] |
| 委員 | 加藤 伸司 | [認知症介護研究・研修仙台センター長] |
| | 高見 国生 | [社団法人 認知症の人と家族の会 代表理事] |
| | 三輪 和夫 | [厚生労働省大臣官房審議官（老健、社会（災害対策を含む）、
障害保健福祉、医療・介護地域連携担当)] |
| | 柳 務 | [認知症介護研究・研修大府センター長]（敬称略、五十音順） |

◆推薦経過

◇推薦基準

①「認知症を知る」ための取り組み

地域の多様な人々が認知症と支援について理解を広めるための先進的な取り組みがなされている

②認知症の人同士が出会い、話し合い、ともに参加する地域の活動

地域の認知症の人同士が出会い、自分たちの声や力を出しながら、参加する地域での活動が取り組まれている

③地域にある生活関連領域の人々が参画・協働する取り組み

地域での住民生活に関連した多様な業種（商店、交通機関、金融機関など）や関係者が加わった先進的な活動が展開されている

④地域の人々と行政が協働する取り組み

地域の人々と行政とが協働しながら、共に暮らす町づくりを進めている先進的取り組みがなされている

⑤活動の成果・成熟

内容や成果が充実し、広がりを見せている取り組みである

⑥今後や他地域での展開可能性のある取り組み

今後さらに継続・発展する可能性や他の地域でも展開する可能性がある内容や方法である

◇一次推薦

平成21年11月12日の一次推薦委員会で推薦基準にもとづいて検討し、15点の地域活動を推薦候補とした。

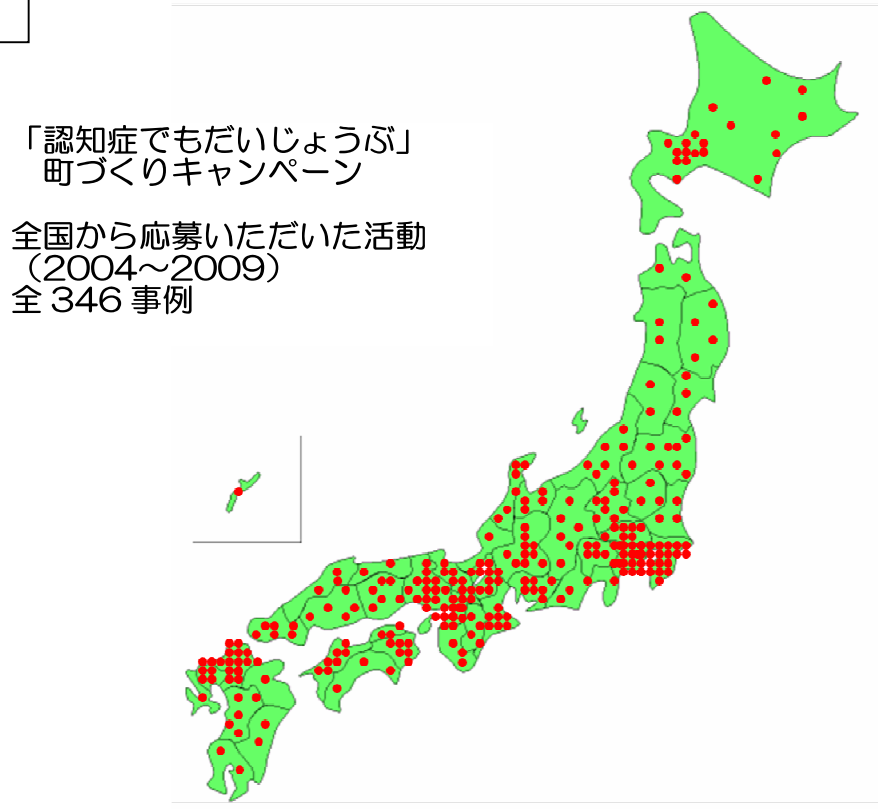
◇最終推薦

平成21年12月18日の地域活動推薦委員会では、まず全委員によって15点の地域活動について慎重に検討を行った。続いて、委員長の司会のもとで各委員からそれぞれの活動に対する推薦理由および課題点が述べられ、様々な角度からの討議の結果、全員一致で7点の推薦を決定した。

地域活動推薦委員一覧

委員長	堀田 力	[財団法人 さわやか福祉財団 理事長・弁護士]
委員	池田 恵利子	[いけだ後見支援ネット 代表]
	井村 徳光	[愛知県東浦町 町長]
	勝田 登志子	[社団法人 認知症の人と家族の会 副代表理事]
	北橋 健治	[福岡県北九州市 市長]
	児玉 桂子	[日本社会事業大学 教授]
	辰濃 和男	[ジャーナリスト]
	藤井 克徳	[きょうされん 代表]
	町永 俊雄	[NHKキャスター]
	村田 幸子	[福祉ジャーナリスト]
	吉田 一平	[ゴジカラ村 代表] (敬称略、五十音順)

参考



4. 「認知症の人『本人ネットワーク』支援」活動報告

1) 平成 21 年度事業概要

本人ネットワーク支援事業では、全国各地の家族会やケア関係者の協力を得て、「本人ネットワーク」支援をすすめています。21 年度は、認知症の人自身からの情報発信、認知症の人同士のピアサポートを支援する取り組みを広げ、持続可能な条件を整えることを目的としました。また、認知症の人たちの社会的な力の回復（エンパワメント）、認知症に対する生活支援の向上につなげることも目的とし事業を行いました。このため、より身近な地域での交流会の実施ができるようになることや、本人たちが情報発信し支えあえるような内容をすすめていきました。

具体的には、①全国 7カ所近隣の認知症の人たちが集まる日帰りの交流会、②関西と関東で 1 回ずつ「支援者養成研修」と「本人支援の実践報告」、③春と秋の認知症の人による本人交流会、④認知症の人がインターネットや紙媒体で情報発信をしていくなどのことを行いました。

本人ネットワーク支援委員会では、認知症の人と家族の会や認知症介護研究・研修東京センターと連携し、全国各地の家族会やケア関係者の協力を得て、「本人ネットワーク」支援事業をすすめています。この事業は、認知症の方同士が知り合い、意見交換やお互いの経験の共有ができるように、また、自分たちの思いを社会に伝えるために認知症の方同士がつながっていくための支援を行うことを目的としています。

2) 支援委員会

(1) 委員会メンバー（*委員長・五十音順）

梅原早苗	愛都の会
大橋美幸	認知症の人と家族の会
沖田裕子	大阪市社会福祉研修・情報センター
柏木一恵	浅香山病院
勝田登志子	認知症の人と家族の会
高見国生	認知症の人と家族の会
田淵よしみ	滋賀県社会福祉用具センター
永田久美子	認知症介護研究・研修東京センター
干場 功	彩星の会
*松本一生	松本診療所ものわすれクリニック院長、大阪人間科学大学教授、 認知症の人と家族の会
村上敬子	認知症の人と家族の会

3) これまでの事業の流れ

事業1年目(2005年度)

- * 本人の意思をくみ取る活動が国内で、どのように取り組まれているかについて調査
↓ そのノウハウを元に

事業2年目(2006年度)

- * 本人会議の実施 本人からのアピール
↓ 認知症の本人が求めていることを社会に知ってもらう

事業3年目(2007年度)

- * 全国的な本人交流会を実施
- * モデル地域での本人交流会の実施
- * 支援者養成研修のあり方を考える
↓

事業4年目(2008年度)

- * 支援者養成研修のための研修教材の開発
- * 支援者養成研修の実施 9地域
- * 本人ヒヤリング
各地域でも本人同士の交流がされつつある
↓

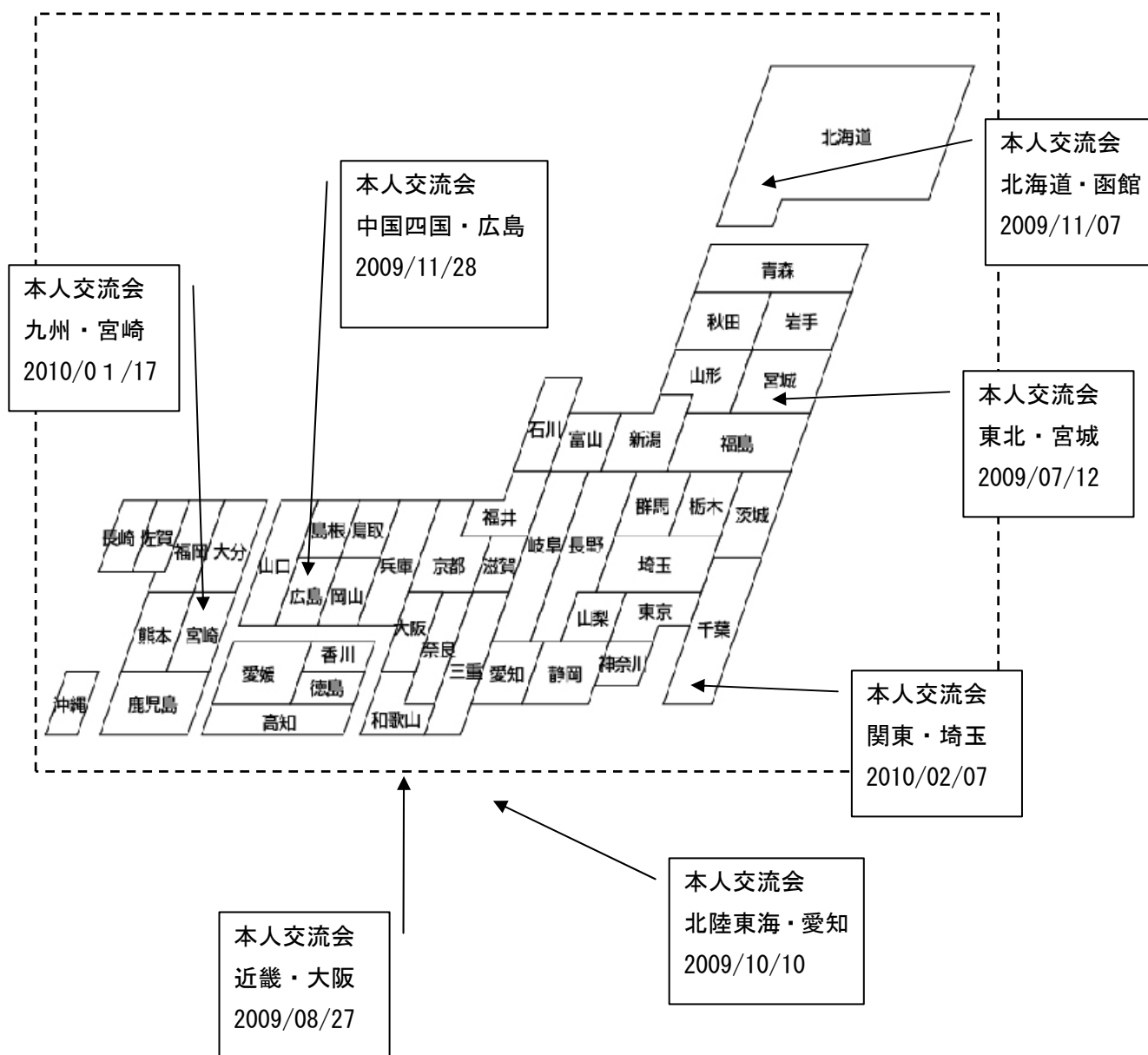
事業5年目(2009年度)

- * 認知症の人自身からの情報発信、認知症の人同士のピアサポートを支援する取り組みを広げ、持続可能な条件を整える
- * より身近な地域での交流会の実施ができるようになることや、本人たちが情報発信し支えあえるような内容をすすめていきました。
 - ① 全国7カ所近隣の認知症の人たちが集まる日帰りの交流会
 - ② 東日本と西日本で1回ずつ「支援者養成研修」と「本人支援の実践報告」
 - ③ 春と秋の認知症の人による本人交流会
 - ④ 認知症の人がインターネットや紙媒体で情報発信



4) 本人交流会を全国に広める

全国7箇所近隣の認知症の人たちが集まる日帰りの交流会



すでに交流会を行っている地域が近隣県の認知症の人と家族、支援者に呼びかけて交流会を行いました。

身近に本人交流会がない人や、今後、本人交流会を立ち上げる予定の支援者の参加を促し、他の地域でも交流会ができるように働きかけました。

各地の交流会では、認知症の人同士、また支援者で交流を行い、今後各地域で交流会を行う上でのネットワークができました。

北海道の交流会の中で

【困っていることの話から、本人交流会の話へ】

支援者「〇〇さん（Aさんの名前）、何か困っていることありますか」

Aさん「困っていることない」

Bさん「今、困っているとしたら、仕事がないことだ」

支援者「どんな仕事がしたいですか」

Bさん「人事労務関係の…」

支援者「なんか難しそうな仕事ですね」

司会「〇〇さん（Cさんの名前）はどうですか」

Cさん「困りごと電話相談っておりますね。」

（本人交流会のチラシで連絡先の一つが家族会になっているのを見ながら）この支える会ってどこまで支えるの？」

支援者「どちらかと言うと家族の…、サービスもないし…、自分たちで悩みを言ったりして積み重ねてきてるんですね」

Cさん「函館の支える会っていうのも、家族の…」

支援者「これからじゃないですか、本人交流会もはじまったし」

支援者「〇〇さん（Cさん）が力になるかもしれないし」



【認知症に対する工夫の話】

Aさん「病院で薬もらって毎日飲んでますけど、血圧は何ともない。朝野球（草野球）で審判やってるもんだから、あっち痛い、こっち痛いというのはない。物忘れは自分で物を書いたりしているから大丈夫じゃないかと思っている。なんだかんだ、自分で考えてするようにしている。新聞でよく出ますよね。これがいいかなと思ったら本屋行って、なかったら注文したりして、気に入った本っていうか、注文してみても違うこともあるからね」

支援者（Aさんが自己紹介でドリルをしていると言っていたため）「ドリルされてます？」

Cさん「ドリルなにそれ…。そういうのに参加したいんだよね。（パワーリハビリは）これまでに2回ほど見に行ったんだけど。宅老所なのかな、面倒見てくれて（というところを探している）。段取りっていうのが困りますね、掃除するのに、こうしてから先にとか、そういうのは何…」

支援者「ヘルパー」

Cさん「ヘルパー。要支援だと思ってたら要介護だったんだ。でも、これまでに利用したことない」

支援者「ケアマネジャーさんに言ってみれば」

支援者「〇〇さん（Aさん）は何かされていますか」

Aさん「新聞読んで、本買ってきて、内容が違ったりすることもあるけど」

支援者「おすすめは。どういうジャンルを読むんですか」

Aさん「心理学が多い、物語はあまり…」

09. 11. 12 付、北海道医療新聞より



5) 「本人支援の実践報告」と「支援者養成研修」

本人交流会、本人支援の先駆的取組みを行っている事業所や企業などを講師に招いて実践報告会を行いました。8月に東日本（神奈川県）、12月に西日本（京都府）で行い、本人支援のあり方を考えました。同日の午前中には支援者養成研修を行い、本人交流会を身近な地域で実施してもらうための支援者を養成しました。

■実践報告会「認知症の人の社会参加を考える・東日本」（8月29日・神奈川県）

認知症になっても、自分の力を活かして自分らしく生き続けたいというのは、誰しも共通の願いです。認知症の人の思いや実践報告を通して、認知症になった時に社会の一員として暮らし続けることについて考えるべく「認知症の人の社会参加を考える」をテーマに、本人ネットワーク支援事業・実践報告会が、本人ネットワーク支援委員会の主催で、横浜・県民共済みらいホールにて開催されました。

本人ネットワーク支援委員会の高見国生委員（認知症の人と家族の会代表）の開会挨拶に続き、厚生労働省認知症・虐待防止対策推進室の千葉登志雄室長は「超高齢社会になる中、認知症対策は重要課題」であり、「『認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト』において取りまとめられた対策の一つである『認知症を知り地域をつくる10カ年構想』の推進や、若年性認知症の支援など実現していかなければならない」と述べられました。



「今後ますますの支援を」と呼びかける
千葉登志雄／認知症・虐待防止対策推進室長

私の思い

本人の発表「私の思い」では、50代でアルツハイマー型認知症と診断された青津優子さんが御主人とともに壇上にあがられ、得意の落語「まんじゅうこわい」を絵本をみながら披露されました。今も落語絵本の朗読をしており、その迫力とたくみな演技（？）に会場は大きな笑いに包まれました。沖田裕子委員のインタビューのもと、「（診断された）最初はだれにもいえず、泣きたいくらいだった」が、家族の会などさまざまな方と出会い、大好きな水泳にもスポーツクラブの顔なじみの会員さんに着替えなど助けてもらって続け、ガイドヘルパーさんと映画に行くなどの日々の暮らしを「楽しいわ」と笑顔で話されました。また同じ病気の人へのメッセージとして「自分のことだけでない」「なるべくいっしょにいろんなことをしたい」「悩まないで、困ったときには人に助けてもらう」と語られました。御主人も「テレビに何度か出たが、ご覧になった方もおり、近所の人やスポーツクラブで助けてくれる方も多い」と述べられました。



大迫力の「まんじゅうこわい」

シンポジウム「認知症の人の今とこれからー生きがいと社会参加」

杉山孝博氏（川崎幸クリニック院長）のコーディネータのもと、5名のパネリストが社会につながる活動とそこから生まれている課題が発表されました。若年性認知症の方を対象に保育園での「仕事」を請けおうデイサービス「おりづる工務店」の前田隆行氏は、プロとして社会とのつながりを「リアル」につくることによって、工務店メンバーが生きがいや達成感を得ている様子を説明し、若年性認知症への取り組みがまだ各地に広がっていない中、地域密着型の枠を超えてサービスが利用できるよう呼びかけられました。また、若年認知症社会参加支援センター「ジョイント」の村中知恵氏は、片道1時間以上かけて通いながら生き活きとジョイントで「仕事」をされている方の様子を伝え、各地域に就労型の施設が必要だと訴えられました。またその一方で、杉山氏からは、仕事を続けることだけが必要ではないという話もだされ、「（仕事のミスがプレッシャーとなり）会社をやめてほっとした」と語った男性の話も述べられました。若年認知症グループどんどの中川和子氏や、認知症の人と家族の会神奈川支部の高野静子氏・西村典子からも、さまざまな行事を通じて、ご本人が力を発揮されている様子が発表され、さまざまな立場、さまざまな場面でのご本人の生きがいや社会参加について議論がなされました。



各パネリストからの発言に、会場からも熱心にうなづく姿がみられました

■実践報告会「認知症の人の社会参加を考える・西日本」（12月6日・京都府）

私の思い

12月には京都で同じように実践報告会が開かれ、山本きみ子氏が本人の思いを、夫、支援者の勝田氏と共に語りました。看護師としての仕事を経て、認知症のことが知りたいと認知症の人と家族の会に入会し、そこでいろいろな話を聞いたことが、後に自分の病気に「気づくきっかけになった」と語られました。今は、本人が作る交流会に主体的にかかわっていることも話されました。

シンポジウム「認知症の人の今とこれからー生きがいと社会参加」

松本一生氏（松本診療所ものわすれクリニック院長）のコーディネータのもと、4名のパネリストが社会につながる活動とそこから生まれている課題が発表されました。有限会社なでしこの吉川浩之氏は、足立昭一氏の就労支援の経験について、出来る仕事だけをしてもらうのではなく、双方にニーズとメリットがあり成り立つものだと述べられました。デーサービスセンター侶の松木香代子氏は、認知症高齢者が販売に関わることが介護保険利用中には認められない矛盾について話されました。愛都の会の梅原早苗氏は、若年認知症支援の会での本人交流の実際と必要性について話され、認知症の人と家族の会富山支部の勝田登志子氏は、本人が作成したパワーポイントを元に地元での本人の活動を紹介しました。

6) 認知症の人による本人交流会と「だいじょうぶネット通信」の作成

認知症の人たちが、支援者と相談しながら企画し、認知症の人に呼びかけて、希望する認知症の人たちが集まる宿泊の交流会を春と秋2回実施しました。参加者は、認知症の人1人に家族1人、近隣のサポーター1人の3人を1組として10組程度の人が集まり交流会をしました。これは、各地域にもどった時に同様に交流会を行ってもらうためです。交流会では、本人、家族がわかれて「つどい」を行ったり、スポーツ、散策、観光などを行いました。

春の交流会で部屋の間仕切りなど課題となったことを、秋の交流会では本人、家族の協力で改善したり、「だいじょうぶネット通信」を本人が中心となって作成しました。この通信は、認知症の人と家族の会の会報「ぽーれぽーれ」約17,000部と一緒に発送され、またこれまでの交流会参加者、支援者養成研修修了者に発送しました。

だいじょうぶネット通信
2010年1月号
認知症の人本人による交流会報告

若年認知症と闘う

6人の武士と 3人の姫君

認知症の人と家族、サポーターが共につどい、認知症があっても笑顔で暮らすために日常的な交流ができるキッカケづくりの交流会です。新しい仲間との出会いの場として2007年より春と秋に年2回つどいを開いてきました。本人ネットワーク支援委員会主催になり第2回になり最初から通すと6回目になります。

150年経つ古民家の中でのいるりを囲んで語り合い、枕を並べて修学旅行のように寝ます。野山を散策したり、体育館でバドミントンや卓球大会、そしてダンス講習会なども行います。自然がゆたかな農山村でみんなでつくる2泊3日の「思い出づくり」の交流会でした。この報告も自分たちでつくりましたので、ご覧ください。(編集委員 山瀬生雄)

まわりの人にかけてほしいこと

- ①普通の病気と比べ認知症は差別と偏見をもって見られる。普通の病気の人と同じに扱ってほしい。
- ②認知症の病気についてわかってほしいし、症状は人により千差万別であることを理解して、本人の本当の気持ちを分かってほしい。
- ③同じ人間として平等に付き合ってもらいたい。
- ④認知症の病気をオープンにしてわかってもらいたい。
- ⑤ガイドヘルパーさんが多くなると、映画を見に行きやすくなる！
- ⑥今一番願っていることは、若年性認知症の薬の開発を急げ！
- ⑦じいちゃん・ばあちゃんが安心して暮らせる社会を！ 後期高齢者医療制度をやめる！
- ⑧自分のペースを大事にしてほしい。

まわりの人にかけてほしいこと

- ①普通の病気と比べ認知症は差別と偏見をもって見られる。普通の病気の人と同じに扱ってほしい。
- ②認知症の病気についてわかってほしいし、症状は人により千差万別であることを理解して、本人の本当の気持ちを分かってほしい。
- ③同じ人間として平等に付き合ってもらいたい。
- ④認知症の病気をオープンにしてわかってもらいたい。
- ⑤ガイドヘルパーさんが多くなると、映画を見に行きやすくなる！
- ⑥今一番願っていることは、若年性認知症の薬の開発を急げ！
- ⑦じいちゃん・ばあちゃんが安心して暮らせる社会を！ 後期高齢者医療制度をやめる！
- ⑧自分のペースを大事にしてほしい。

まわりの人にかけてほしいこと

- ①普通の病気と比べ認知症は差別と偏見をもって見られる。普通の病気の人と同じに扱ってほしい。
- ②認知症の病気についてわかってほしいし、症状は人により千差万別であることを理解して、本人の本当の気持ちを分かってほしい。
- ③同じ人間として平等に付き合ってもらいたい。
- ④認知症の病気をオープンにしてわかってもらいたい。
- ⑤ガイドヘルパーさんが多くなると、映画を見に行きやすくなる！
- ⑥今一番願っていることは、若年性認知症の薬の開発を急げ！
- ⑦じいちゃん・ばあちゃんが安心して暮らせる社会を！ 後期高齢者医療制度をやめる！
- ⑧自分のペースを大事にしてほしい。

今、一番したいこと

- ①病気になって田舎に引っ越した。のんびり楽しく暮らしたい。
- ②病気を治したい。
- ③家族の会になるべく参加したい。
- ④自分でできることをやりながら、命ある限り楽しく生きたい。
- ⑤イタリア・ドイツに続いて、来年はフランスに行く。
- ⑥今自分がやっていることを楽しみたい。
- ⑦主人と一緒にあちこち旅行をしたい。
- ⑧海外旅行をしたい(トラブルなく、美しい景色、おいしい食事と各国各地で交流し「思い出」作りができればいいな～)。

7) 認知症の人がインターネットで交流

ホームページアドレス <http://www.dai-jobu.net/>

—ホームページ「だいじょうぶネット」ブログより本人の投稿を抜粋—

●耳鳴りがして困っています

〇月〇日より音が非常にうるさく感じられ、耳鳴りがして部屋で絵本をみてすごしています。本を読んだりしていると、耳鳴りが激しくなりました。疲れっているときは、何もしなくて、ボーとするのが一番よい生活の仕方だと、感じました。

●認知症になると外出するとなぜ疲れるのか

普通の人には電車に乗っていても、ほかの事を考えていても目的の駅に着くと意識にしていなくても降りることができるが、認知症になると考え事をしていると目的地についているにもかかわらず、無意識の領域では処理できなく乗り越えてしまう。認知症になると信号の色を意識しないと赤でも横断してしまう。

このように認知症になると、今まで意識しなくてできていたことが、意識しないとできなくなり常に注意を払わないとできなくなるので、外出すると非常に疲れる。

●心の闇

子供は私の病気をどういうふうにとっているのか？今は、家でゴロゴロしているそういう姿しか見せていないけど、それをどうとっているのか？病気のことをどういうふうに言ったらわかってもらえるのか？自分自身、家族と孤立していく自分にいや気がさしてきている。家族が大事。家族をどういうふうに守っていけばいいのか・・・私の父親は、神棚や仏壇を作っていて、形ある物を残してくれた。子供に何にも残せない自分に腹が立つ。イライラもする。声だけしか残せない自分に腹が立つ。

●できることに目を向けましょう

認知症になると、できなくなったことばかりにめがとまり、まだできることに注目されません。できなくなったことを嘆くのではなくまだできることに目をむけ、前向きに生きましょう。

●こんな認知症サポーターを望む

この前、急に携帯電話に迷惑メールが来るようになりました、友人よりメールアドレスの変更の仕方をおそわり、アドレスを変更してことなきをえました。

認知症でも軽症ならば、パソコンも携帯電話も使えます、ただし普段あまり使わない機能は忘れてしまいます。そのようなと、それをサポートしてくれる認知症サポーターが必要です。介護のことは、介護のプロに任せて生活の質をたかめる、情報ボランティアのニーズがこれから増えます。

ケアマネジャーに望むことは、自分がパソコン、デジカメ、携帯電話、などの操作がわからなくても、その操作を知っている人を紹介してくれることを望む。

5. 「認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」活動報告

今、わが地域をみつめてみよう

認知症の理解が広がり、
認知症の人と家族を支えたい
という地域の人たちが増えて
います。

認知症の理解が広がり、
認知症の人と家族を支えたい
という地域の人たちが増えて
います。

- *わが町の認知症の本人と家族は、
初期から最期までの長い経過の日々を、
安心して暮らせているでしょうか？
- *本人と家族は、当事者ならではの情報や思い、
力を周囲に上手く伝えて、求める支援を
受けられているでしょうか？

●すぐ忘れちゃう。

すぐわかんなくなるのよ。

だから、かわりに覚えておいて・・・。

お願いだから、今のこと書いておいて。

いった自分が忘れてしまうのよ。

お願い、ね。

(アルツハイマー型認知症、女性)

△何でも言っているとされるけど、言えないです。

本当は、お父さんのことをもっとわかって話し

かけてほしい。お父さんらしいことをさせて

ほしい。そうすれば、もっと元気になると思う。

見違えるほどいい時もあるんです。

お父さんのあの姿をなんとか保ってほしい。

(血管性認知症の夫の妻)

この活動のねらい



本人・家族が、当事者ならではの情報や
思い、力を「**センター方式***」を使って
関係者にうまく伝え、
対話と関係を深めながら
よりよい支援を一緒に生み出し、
安心して暮らせる町を
共に築いていくことを推進しています。

センター方式とは 正式名称: 認知症の人のためのケアマネジメント「センター方式」

- 「認知症の初期から最期まで、どこに住んでいても安心して、自分らしく暮らし続けたい」。そんな本人・家族の願いを実現するために作られました。(国の研究補助事業)
- 本人と家族を中心に、立場や専門を越えて共通シートを使い、互いの情報や思い、力、アイデアを寄せ合います。
*シートはホームページ「いつどこネット」から無料で入手いただけます。
- シートをもとに話し合い、本人と家族がよりよく暮らすための手がかりを見つけたり、ケアプランに反映させて、ケアサービスを具体的に充実させていきます。
- いつでも、どこでも、誰でも使えます。
 - ・予防から症状が進行した時期、ターミナル期まで
 - ・在宅でも、施設・病院でも

平成21年度の取り組み



1. 家族が気軽に使ってみるサポート

家族の集い等の機会に、センター方式を気軽に使ってみるためのミニ学習会を開く支援をしました。
家族が活かした成果が、多数寄せられています。
(認知症の人と家族の会、各地域の家族会と協力)

2. 家族が専門職研修で報告

実際に活用した家族が、医療・福祉職員の研修で、本人と家族の情報・声をシートで具体的に知り、支援に活かすことの大切さと効果を専門職に伝えました。参加者から大きな反響：家族ともっとつながりたい！

3. 地元で共に学びよりよい支援を進める

家族、ケア職員、支援者等が地元で一緒に学び、立場を超えてよりよい支援を一緒に編み出していくための研修や検討会の開催を支援しています。

情報を広く伝える
ホームページ・「つつじネット」

本人・家族の情報を活かして、互いの安心とつながいを！

- 本人・家族が伝えたいことをシートにメモし、話しあおう、ケア関係者や医師に手渡そう。

活用は1枚からでOK！
自分で書かなくても、
項目をガイドに話そう。
代筆してもらおう。

本人の姿と気持ちシート【C-1-2】

家族の気持ちシート【B1】

今の気持ちや要望を記そう。日々の思い、人にわかってほしいことをありのまま書こう。

生活史シート【B2】

少し立ち止まり、本人と家族の生活の歴史を振り返ってメモしてみよう。
忘れかけていた大切なことが蘇る。

日々の暮らしの実際を伝えるシート

本人の様子や介護で起きているありのままを。
・日々の様子・本人の状態の変化【D4/D3】
家族なりの介護の努力・工夫も添えて

これまでの経過シート【A1/A2】

認知症になり始めたころからこれまでのことを振り返ってメモしてみよう。
一度、記しておく、後あとと便利。

本人の暮らし方や力のシート

- ・本人の習慣・好み【B3/B4】
- ・本人のわかること・できること【D1/D2】
- ・医療、心身の全体【B2/C1】
- ・地域や人とのつながり【A4】

支援してほしいことをまとめるシート（ケアプラン導入シート）【E】

本人と家族が支援してほしいこと、支援してほしい時間帯、うまくいくための家族なりの工夫やアイデアなどをメモしよう。

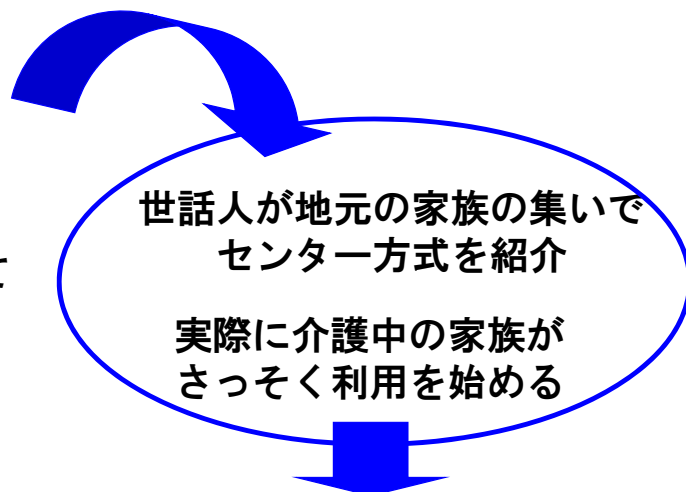
1. 家族が気軽に使ってみるサポート

- * 少人数で話し合いながら、センター方式をわかりやすく学び、気軽に使ってみるための支援をしています。
認知症と家族の会の支部や地元家族会のつどい、自治体や地域包括支援センター、病院や介護事業者の家族会、家族同士の少人数の集まりなどで。
- * 教材の提供や地元講師の派遣をします。
- * 時間数や日数は、それぞれに合わせて柔軟に。
1回のみ、複数回で、継続的に、など。
- * 家族が知っていることや家族なりの思い、要望、耳にしている本人の声などを、シートにメモしたり代筆してもらい、家族同士の話し合い、ケア関係者や医師との話し合い、ケアプランの作成等に活かしていきます。

家族の会でのセンター方式の学習会がきっかけに・・・
夫と娘さんがセンター方式を活用。
介護サービス職員との連携に役立っている例。



認知症の人と家族の会
千葉県支部の世話人の
集まりに講師が出向いて
ミニ学習会。



家に持ち帰り、夫と娘さんと話し合いながら
少しずつシートに記入を始める。

書いていたらいろいろなことを
思い出しました。

シートをみながらだと
こんな情報が大事なんだ、と
家族からプロに伝えたいことが
たくさんみつかると！



A-1 基本情報シート

本人の変化に気づいてからの経過をメモ。
初期の変化や出来事を記しておく
と後で役立ちます。

B-1 家族シート

本人や介護についての家族の思い、
受けているサービスへの要望などをメモ。
ケア関係者に十分に伝えきれないことも
メモにして渡せます。

B-2 生活史シート

暮らしの歴史の中から
本人が安心して生き生き
暮らす手がかりを見つけていく。
入所・入院の時にも大事なシート。

- ・ レザークラフトが得意で教室やお店を開いていた。
- ・ 母は、近所の子供たちにも親しまれていた。
- ・ 社交ダンスや水泳など、趣味が多彩だった。

(娘さん)

母の変化についていけず、
毎日をこなすのに精一杯だった。
このシートに取り組み始めて、
初めて立ち止まって確認できた。

B-3 暮らし方シート

築いてきたなじみの暮らし方を
大切に守っていくためのシート。
家族ならではの具体的な情報が
支援関係者にもとても役立ちます。

母は、毎月白髪染め
をしていた。
パーマをかけず
ストレートの
ロングヘア。
おしゃれだった。
色は、紺、青系が
好き。

ケア職員が
この情報を
活かして
髪を染める
支援を実行。

娘さん
「うれしかった」

自分の意見を
しっかり持っている。
やさしい思いやりがある。
責任感がある。

(娘さん)

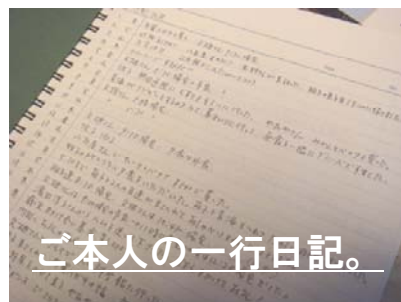
このシートを書いて、母が元気だった
頃の習慣や好みを思いだし、泣きながら
書いた。でも、「こんな人だった」
ではなく「こんな人なんだ」と感じた。

シートを活用してみた家族の声

夫：*本人がもう少し元気なうちなら、もっと活かせた。
要介護度がどんどん進み4に。
今は職員とのやりとりもうまくいき安定している。
センター方式をもっと早い時期から使えていたらよかった。
*小規模多機能サービスを利用し、通いと泊まりを利用
しているが、センター方式が役にたった。もし、これが
なかったらゼロからのスタートだったと思う。

*誰か、家族の話を聴いて書き留めてくれる人がいるといい。

娘：母は結婚以来、一行日記をつけ
ていた。(発症後は)夫や娘、孫
のことばかり書いてあった。
おかあさんはさみしかったんだな、
と感じた。母の思いがわかったの
もセンター方式をつけてみて。
こうしたものが大切なんだと感じた。

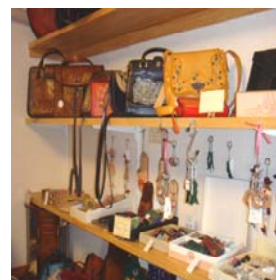


ご本人の一行日記。

家族とシートを活用しているケア職員の声

○本人の理解とケアにとっても役立った

- ・ 家族のシートはとても具体的。自分たちはそこまで細かくしらない。
- ・ 本人の本来の姿がよくわかる。
- ・ 家族は全体をみているので、本人が何が心配かどういう状態で不穏になるのか、何を気をつけたらよいか、シートでよくわかる。
- ・ 本人が何をしたら楽しむのか、何が一番大切かも。



本人の宝物！
(手作り)

○家族と気持ちをひとつにしてがんばっていける

- ・ 家族の気持ちもシートでうかがえる。
- ・ スタッフも人間なので本人の状態等でむっとすることもあるが、シートで情報交換や話しあいができ、家族とお互いの大変さを理解しあえるつながりができた。

○シートの情報をもとに専門職としての提案ができる

- ・ 本人がデイにいくまでの家族との格闘ぶりがわかり、そこでの苦労が具体的にわかることで、こちらからも提案ができる。

2. 家族が専門職研修で報告

*センター方式を活用した家族を、介護や看護の職員の研修にゲストとしてお招きし、報告してもらった機会を作りました。

報告を聞いた専門職の声

- 本人と家族が辿ってきた長い経過がシートでわかる。目の前のことだけで判断してはいけないと痛感。
- 家族の思いの深さ、力の凄さにきづかされた。シートを家族と活かしたら、お互いがもっと楽になり、ケアの質もあがると思った。
- 医師にもシートを見てもらうと薬や身体ケア、ターミナルでとても役立つことがわかった。



報告した家族より

*本人が語れるうちに、家族が疲れきってしまう前のできるだけ早くからセンター方式を使って！

3. 地元で共に学び よりよい支援を一緒に進めていく

* 立場や専門を越えて、本人と家族の視点にたって一緒に学び、センター方式を地域の共通言語・道具として活かしながらつながりあってよりよい支援を生み出していくための研修の開催を支援しています。

* 今年度は、全国で80地域。

主催は、自治体、地域包括支援センター、社会福祉協議会、介護支援専門員協会事業者、地域のNPO、家族会、地元有志等。

* 専門職、家族、民生委員、サポーター、成年後見人、医師が参加した地域も。

地元で一緒に取り組める仲間ができた！



<研修後、センター方式を専門職と家族が共同活用した成果例>

- ・ 激しい症状が減った
- ・ 本人が喜んでデイに行くようになった
- ・ 家族が職員と相談できるようになり、楽になった
- ・ 家族を通じてシートが医師の手に届き、服薬調整がうまくいき、本人が安定。家族も体調がよくなった、ほか

認知症の本人、家族は、
たくさんの思いと力をもっています。



「一人でも多くの本人と家族が」
「少しでも早く、楽に」なるために

本人と家族の声に耳を澄まし
伝え合い、力を活かして支えあう
地域のしくみを一緒に創っていきましょう。

お問い合わせ：認知症介護研究・研修東京センター 03-3334-1150

*シートは、ホームページ「いっどこネット」から入手できます(無料)

6. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の啓発・普及活動

■会員について ※会員一覧は、p71 をご参照

現会員数－99団体・個人

※第1回100人会議(発足時)－82団体・個人、第2回－96、第3回－100、以後第5回まで同様

■情報発信

◇ホームページ

1カ月に1回程度更新

閲覧数累計：約13万2千(平成21年4月～翌1月)

*町づくり検索サイト(291事例掲載、今春追加予定)

*モデル活動その後レポート 更新中



◇啓発リーフレット

「安心して暮らせる町をめざして」(新版)

全国各地の講演会など(約70カ所)にて

約2万6千部を配布



ほか、米国でのアルツハイマー病賢人会議にて、本キャンペーンの取り組みを紹介(9月)

■啓発活動(一部抜粋)

6～3月	認知症フォーラムにて啓発リーフレット等配布(NHKが主催または共催、計12回)
6、11、1月	スミセイシニアライフセミナーにて啓発リーフレット等配布(北海道、佐賀、群馬、主催:住友生命健康財団)
9月	世界アルツハイマーデー(9/21)記念イベントへ協力ー記念講演会、全国での街頭一斉活動等
10月	もの忘れフォーラム(10/17開催、大阪、主催:朝日新聞)にて啓発リーフレット配布 「市民発!介護なんでも文化祭」にて、ブース出展(10/24) 介護保険推進全国サミット(10/29-30、北九州市)にて啓発リーフレット配布

◇昨年度にひきつづき、「認知症地域支援体制構築等推進事業」へ資料を提供

<平成21年度マスコミに掲載された記事・番組(一部抜粋)>

■新聞・雑誌掲載、テレビ・ラジオ放映など

4～5月	新聞各紙・雑誌各誌:「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会について
5月	新聞各紙・雑誌各誌、NHK:「若年性認知症で意見交換～本人が厚生労働大臣へ直接思いを伝える(5/12)」
8～9月	NHK BShi「データ放送:福祉とくらし」:町づくりキャンペーン募集案内を掲載
8月	朝日新聞:「認知症支援の大切さ」(8/8) 日本経済新聞:「認知症の人を支えるための地域活動の事例」(8/9)

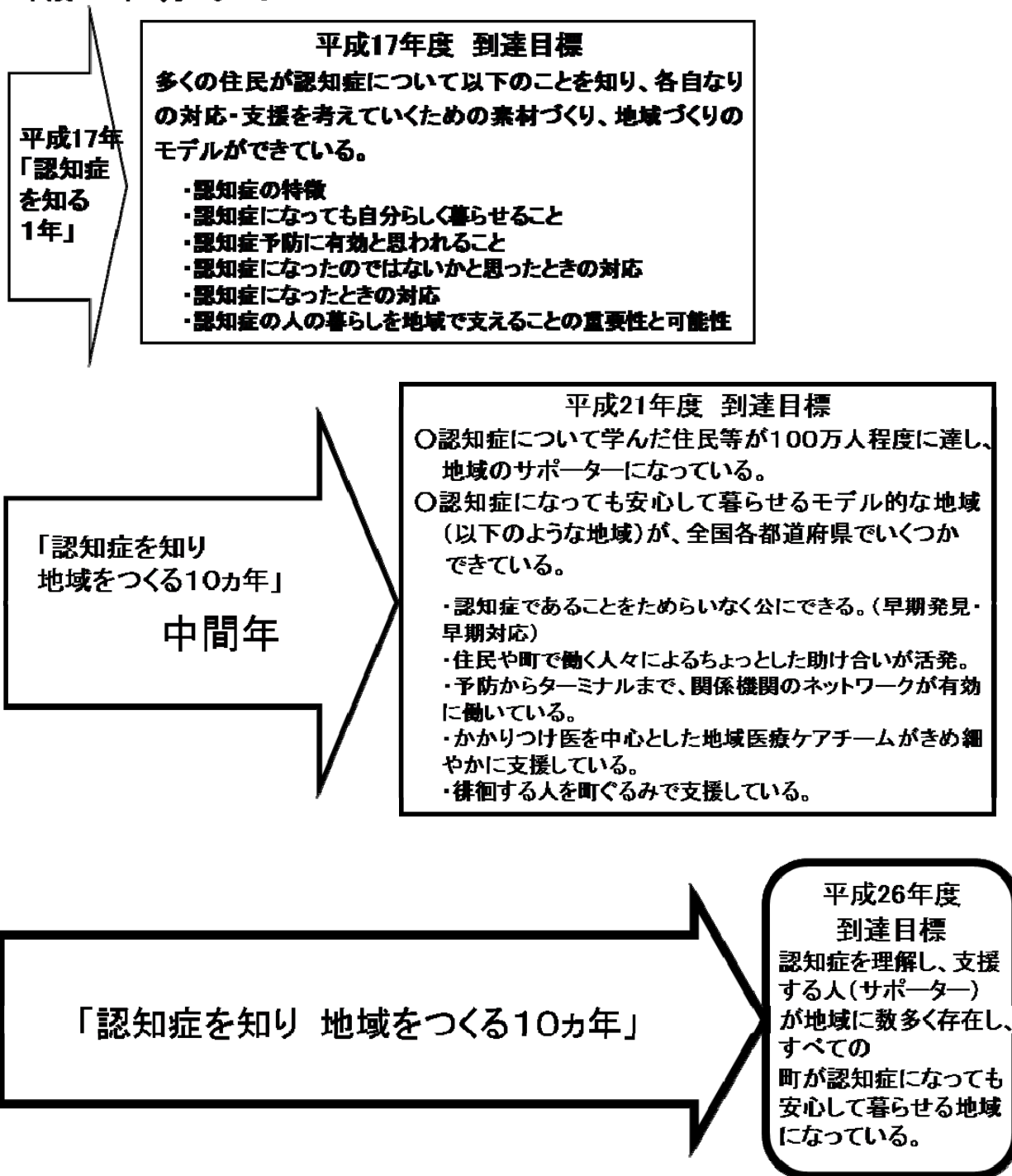
※ほか、全国各地でのサポーター講座開催について記事多数

V. 資料

1. 「認知症を知り 地域をつくる10カ年」の構想

(平成17年4月の厚生労働省資料を基に作成)

平成17年4月スタート

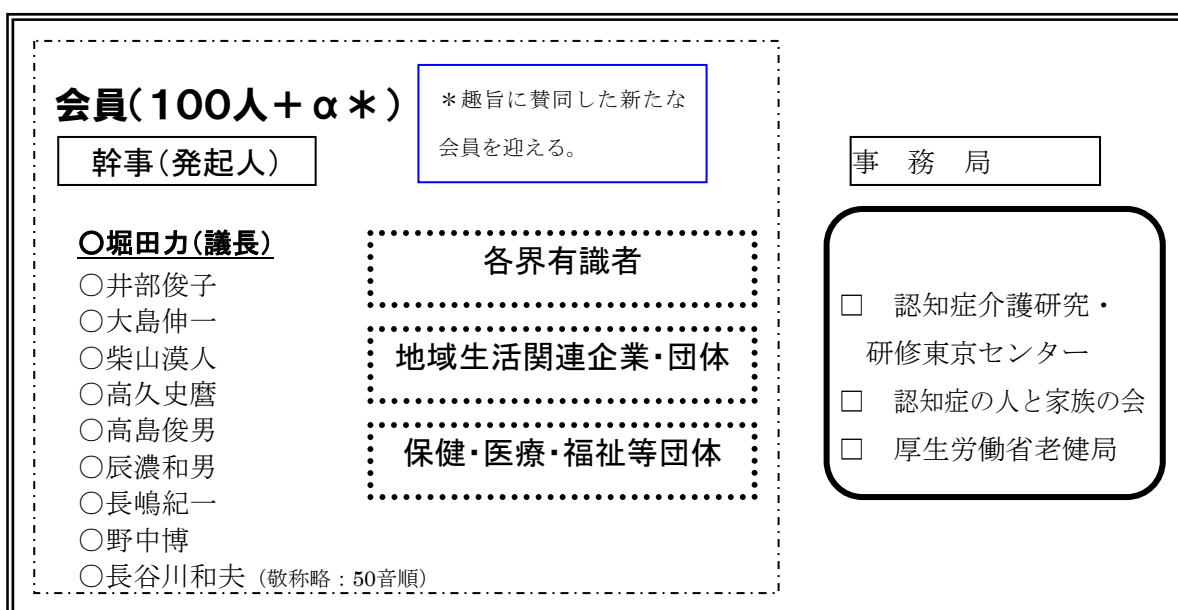


2. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議 会員の役割

【認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の趣旨・役割】

「認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」は、厚生労働省が提唱する「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの趣旨に賛同し、その推進を応援する民間の個人や団体を中心とした運動体である。

具体的な役割は、メンバーそれぞれの立場を活かしながら、認知症に関する知識や情報の普及、認知症になっても暮らし続けられる地域づくりを応援することなどである。



【認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議宣言】

- 1 わたしたちは、認知症を自分のこととしてとらえ、学びます。
- 2 わたしたちは、認知症の人の不安や混乱した気持ちを理解するよう努めます。
- 3 わたしたちは、認知症の人が自由に町に出かけられるよう、応援します。
- 4 わたしたちは、認知症の人や家族が笑顔で暮らしていけるよう、いっしょに考えます。
- 5 わたしたちは、市民や企業人としてできることを行い、安心して暮らせる町づくりをめざします。

【シンボルマークについて】



中心となる丸(青): 本人
 下で支える輪(黄、オレンジ、赤):
 人、地域、制度

本人が内に秘める輝き(=自分らしさ)をみんなで支えていく、という意味をこめています

3. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議会員一覧

平成22年3月末日現在(敬称略、50音順)

幹事 (発起人) 計10名	井部俊子(検討会委員・聖路加看護大学長)、大島伸一(国立長寿医療センター総長)、 柴山漠人(認知症介護研究・研修大府センター顧問)、 高久史磨(検討会委員・自治医科大学長)、高島俊男(検討会委員・エッセイスト)、 辰濃和男(検討会委員・ジャーナリスト)、長嶋紀一(日本大学文理学部教授)、 野中 博(検討会委員・医療法人社団博腎会 野中医院 理事長)、 長谷川和夫(検討会委員・認知症介護研究・研修東京センター名誉センター長)、 堀田 力(議長:「痴呆」に替わる用語に関する検討会委員・さわやか福祉財団理事長)
各界有識者 計13名	足立 啓(和歌山大学システム工学部教授)、生島ヒロシ(キャスター)、 永 六輔(放送タレント)、大熊由紀子(国際医療福祉大学大学院教授)、 落合恵子(作家)、小室 等(ミュージシャン)、 錦織正二(日本弁護士連合会 高齢者・障害者の権利に関する委員会委員長)、 羽田澄子(映画監督)、日野原重明(聖路加国際病院理事長)、松井久子(映画監督)、 村田幸子(福祉ジャーナリスト)、横森美奈子(ファッションデザイナー)、吉行和子(女優)
地域生活 関連企業・団体 計22団体	社団法人 高層住宅管理業協会、全国医薬品小売商業組合連合会、全国銀行協会、 全国公団住宅自治会協議会、全国高等学校長協会、全国石油商業組合連合会、 全国農業協同組合中央会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、電気事業連合会、 社団法人 日本観光協会、社団法人 日本ガス協会、日本商工会議所、 社団法人 日本水道協会、日本生活協同組合連合会、日本製薬団体連合会、 社団法人 日本セルフ・サービス協会、社団法人 日本専門店協会、 財団法人 日本博物館協会、社団法人 日本フランチャイズチェーン協会、 社団法人 日本ボランティア・チェーン協会、日本労働組合総連合会
保健・医療・福祉系等団体 計54団体	介護相談・地域づくり連絡会、玩具福祉学会、高齢社会 NGO 連携協議会、 NPO法人 高齢社会をよくする女性の会、国際長寿センター、 社団法人 コミュニティネットワーク協会、財団法人 さわやか福祉財団、 社団法人 シルバーサービス振興会、社団法人 成年後見センター・リーガルサポート、 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター、 全国市長会、社会福祉法人 全国社会福祉協議会、 全国地域包括・在宅介護支援センター協議会、全国知事会、全国町村会、 全国マイケアプラン・ネットワーク、全国民生委員児童委員連合会、 財団法人 全国老人クラブ連合会、全国老人デイ・ケア連絡協議会、 社団法人 全国老人保健施設協会、宅老所・グループホーム全国ネットワーク、 社団法人 長寿社会文化協会、社団法人 地域医療振興協会、社団法人 日本医師会、 社団法人 日本ウォーキング協会、日本介護支援専門員協会、社団法人 日本介護福祉士会、 社団法人 日本看護協会、日本言語聴覚士協会、日本ケアマネジメント学会、 社団法人 日本建築学会、日本公証人連合会、日本高齢者虐待防止学会、 日本高齢・退職者団体連合、有限責任中間法人 日本在宅介護協会、 社団法人 日本作業療法士協会、社団法人 日本歯科医師会、社団法人 日本社会福祉士会、 日本精神衛生学会、社団法人 日本精神科病院協会、日本成年後見法学会、日本赤十字社、 一般社団法人 日本認知症グループホーム協会、日本認知症ケア学会、 一般社団法人 日本慢性期医療協会、社団法人 日本薬剤師会、 社団法人 日本理学療法士協会、日本労働者協同組合連合会、日本老年看護学会、 日本老年精神医学会、社団法人 認知症の人と家族の会、 財団法人 認知症予防協会、福祉自治体ユニット、 有限責任中間法人「民間事業者の質を高める」全国介護事業者協議会

※社団法人日本経済団体連合会から本キャンペーンにご協力をいただいています

合計:99 団体・個人

4. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議

会員、専門協力員、推進協力自治体 参加リスト（当日予定）

（敬称略、50音順）

■ 幹事

柴山 漢人	認知症介護研究・研修大府センター顧問
長嶋 紀一	日本大学文理学部 教授
議長 堀田 力	さわやか福祉財団 理事長

■ 各界有識者

足立 啓	和歌山大学システム工学部 教授
村田 幸子	福祉ジャーナリスト

■ 地域生活関連企業・団体

全国農業協同組合中央会	くらしの活動推進部 部長 米本 雅春、 高齢者対策室 野口 洋子
日本生活協同組合連合会	福祉事業推進部 尾崎 靖宏

■ 保健・医療・福祉系等団体

国際長寿センター	理事長 森岡 茂夫、大上 真一
財団法人 さわやか福祉財団	安部 博、丹 直秀、宮越 紀美江、和久井 良一
特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター	中山 国彦、他1名
社団法人 全国老人保健施設協会	会長 川合 秀治
宅老所・グループホーム全国ネットワーク	佐藤 邦宏、他1名
財団法人 認知症予防財団	紀平 重成

■ 専門協力員

旭 俊臣	(医)弥生会 旭神経内科リハビリテーション病院 院長
------	----------------------------

■ 推進協力自治体(市区町村コード順)

岩手県遠野市	遠野健康福祉の里 所長 佐々木 文友
東京都世田谷区	地域福祉部 介護予防・地域支援課 河島 貴子、虎谷 彰子
滋賀県彦根市	介護福祉課 上林 千春
大阪府大阪市	健康福祉局高齢者施策部 要援護高齢者担当課長代理 植村 益子
長崎県佐世保市	保健福祉部長寿社会課 一ノ瀬 留美

5. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議 会員からのメッセージ



幹事から…

日本は超高齢化社会になり、100才以上の方も3万人を超えているのですが、疫学調査からは80才台では20～25%、90才台では30～40%、120才ではほぼ100%の人が認知症になると推定されています。これは、認知症が日本では身近な存在であることを示しています。従って子どもから高齢者までもっともっと「認知症」について知ってもらい、お互いに理解し、共感し、協力して、生活を共にしていく必要があります。即ち、国民の多くがサポーターになって、更にボランティアとなって、支え合うような社会、地域を目指したいものです。

私も微力ながら、名古屋市千種区と春日井市におきまして、地域活動に1年のうち100日近くをボランティアとしての生活を送っています。

柴山 漢人／認知症介護研究・研修大府センター顧問

～「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの2015年に向けて～

平成17年に認知症の人と家族を支えるキャンペーンが始まって5年になります。高齢化の進む現況にあって、キャンペーンは着実な発展の歩みを続けています。認知症を支えるサポーターは146万人に達し、認知症の本人の思いに耳を傾ける推進力となった日本で初めての「本人会議」の開催、そして認知症支援体制構築等推進事業が全国で展開されていますが、こうした動きの中、全国各地で町づくりの取組みが成熟しつつあります。町づくりは実に認知症の本人が安心して地域で暮らす最終目標、ファイナルゴールです。そして、継続していくことが力となります。今後に向けて、さらにお互いが支え合う絆をつくっていきましょう。

長谷川 和夫／認知症介護研究・研修東京センター名誉センター長



有識者会員から…

年々、サポーターの数が増加し、「認知症になっても安心できる町づくり」への関心も高まっていることは、本当に嬉しい限りです。また、全国での様々な町づくりモデルや先進的な取組み事例を学び、共有することで、益々「安心できる支え合い」の輪が広がることを期待しています。

足立 啓／和歌山大学システム工学部 教授

◇ホームページでも幹事を中心にメッセージを掲載しています。ご覧ください。

6. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり事例 データベースについて

100人会議ホームページでは、「認知症になっても安心して暮らせる町づくり事例」が検索いただけます。

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議ホームページ
<http://www.ninchisho100.net/>

またはこちらで検索してください

認知症 100人会議 検索

★厚生労働省HPトップからもアクセスいただけます

The screenshot shows the homepage of the website. Callouts highlight the following elements:

- 厚生労働省** (Ministry of Health, Labour and Welfare) logo and a link to '認知症への取り組み' (Initiatives for Dementia).
- Navigation menu: 100人会議とは? (What is the 100-person meeting?), メッセージ&レポート (Messages & Reports), キャンペーン紹介 (Campaign Introduction).
- Hero section: 安心して暮らせる町をめざして ~あなたにもできることがあります~ (Aiming for a town where you can live with peace of mind ~there are things you can do too~).
- Content sections: 100人会議とは? (What is the 100-person meeting?), メッセージ&レポート (Messages & Reports), キャンペーン紹介 (Campaign Introduction).
- Database section: 認知症でもだいじょうぶ 町づくり事例データベース (Dementia is also okay Town-making case study database).
- News section: トピックス (Topics).

取り組みのさまざまな情報を掲載中!

トピックス

- 2009/12/24 「認知症をとりまわす町づくり」キャンペーン報告会開催
- 2009/12/24 「認知症でもだいじょうぶ」が決定した
- 2009/12/19 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンモデル活動の「その後レポート」
- 2009/11/19 2009年後、10月の活動報告を掲載しました。

町づくり事例を検索!
(291事例)

認知症でもだいじょうぶ 町づくり事例データベース

検索結果: 291件

検索条件: 認知症でもだいじょうぶ 町づくり事例データベース

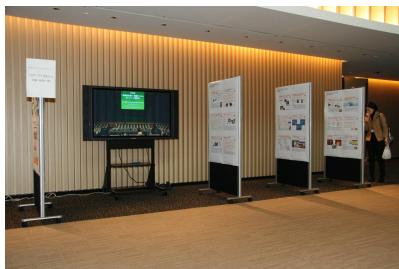
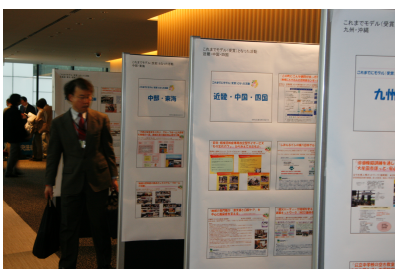
検索結果一覧

町づくりモデル活動のその後レポートを掲載中

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンモデルとなった活動の「その後レポート」

レポート一覧

- 認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーンモデルとなった活動の「その後レポート」
- 認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーンモデルとなった活動の「その後レポート」
- 認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーンモデルとなった活動の「その後レポート」
- 認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーンモデルとなった活動の「その後レポート」
- 認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーンモデルとなった活動の「その後レポート」



報告会の会場でも、これまで受賞・モデルになった活動について、その後寄せていただいたレポートを加えて展示いたしました。

「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会
第6回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2009 発表会

報告資料

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
事務局 認知症介護研究・研修東京センター
平成22年3月